越の山風

四冊合本

全

302
138

始

帝國圖書館藏

越の山風

四冊合本

全

陸軍省編修掛寄贈本

昭和一〇・九・五 帝國圖書館藏

例言

一本書ハ山縣元帥ノ手記ニ基キ参謀本部ニ於テ謄寫シタルヲ更ニ轉寫セルモノナリ

一文中訂正加除ノ跡ヲ存セルハ原書ノ侭ニシテ文字ノ正誤亦一ニ舊ニ仍ル

一餘白ハ参謀本部ニ於テ謄寫ノ際ニ生セシヤ否不明ナルモ敢テ原本ニ隨ヘリ

一文中参謀本部ノ記註ト認ムヘキモノモ亦敢テ改竄セス讀者ノ推斷ニ任セタリ

一字句ノ疑ハシキモノナキニ非レトモ皆原文ニ倣フ但私意ヲ加ヘタルハ特ニ傍注ニ括弧ヲ附シテ之ヲ明ニス

昭和五年十月

陸軍省編修課

越ノ山風

自正月廿七日
至五月廿日

T02-121

帝国図書館蔵

戊辰ノ正月、伏見ノ一戰、賊軍大敗、大阪城モ忽チニ官軍ノ手ニ落チ、德川慶喜以下脫シテ江戸ニ歸リ、朝廷ヨリ直チニ関東征討ヲ仰セ出サレタルハ、何人モ熟知スル所ナリ

是ヨリ先キ、慶應三年ノ十一月ニ、薩長ガ聯合シテ兵出シタル時、長州ヨリ出シタル兵員ハ無慮八中隊ニシテ、毛利内匠之ガ総指揮官タリ、御楯隊ノ山田市之允其ノ指揮官タリ、奇兵隊ノ片野十郎之ガ副タリシナリ、而シテ当時奇兵隊ヨリ選拔シテ此兵員中ニ差出シタルハ、僅カニ二小隊ニシテ、其隊長ハ

三浦梧樓ト三吉六郎トナリキ

山田、片野ノ指揮不ニ属セル右ノ諸隊ハ、伏見戰爭ノ後引續キ京都ニ駐在シ居タルガ、三月ニ至リテ、全部奇兵隊ト交代ヲ命セラレタリ、是ハ右ノ諸隊ガ戰捷ノ餘勢ニ誇リ、動モスレバ不規律ニ流ルヽノ傾向アリシガ為メニテ、藩廳ニテハ、已ニ正月ノ下旬ニ於テ、兵隊繰替ノ内議ヲ決シ、其廿七日ヲ以テ、奇兵隊ニ左ノ書付ヲ達スルト同時ニ、隊ノ參謀時山直八ニ隊員久我四郎ヲ付シテ急ニ上京セシメ、預シメ舍營等ノ用意ヲ為サシメントシタリ

一　先般　朝廷御危急ノ御場合ニ付、不取敢御出

兵相成ル処、当節ニ至リテハ、其藩々ヱ御委任被仰付ル御様子、就テハ不遠内、兵員御定御入替可相成ルニ付、其節ハ無偏無党御詮議可被仰付ル条、御指揮ヲ待、鎮撫罷在ル様、被仰付ル事

右ノ達シ文ヲ見レバ他日兵隊繰替ノ節ハ不偏不党ノ詮義ヲ以テ之ヲ定ムルノ意ヲ明カニシタルマデニテ奇兵隊ヲ出スコトハ未ダ決定ニナリ居ラザリシガ如シト雖モ是レ即チ藩廳ニ於テ特ニ心ヲ用キタル所ニシテ当時ハ各隊熟レモ此名譽ノ任務ニ当ランコトヲ希望シタルコトトテ豫シメ奇兵隊ノ派出ヲ明言スル時ハ或ハ紛擾ヲ免カレザルノ虞レ

アリシナリ

而シテ三月ニ至リ、愈ヨ奇兵隊ガ上京セシメラル、コトニ決スルヤ当時其ノ総監タリシ毛利少輔三郎（伊勢ノ改名ナリ）ハ君侯ヨリ直々左ノ通リ仰セ渡サレタリ

先般　王政御一新之折柄、不圖モ戰爭ト相成逆徒退散之餘、万事御取締方御多端之御場合中、出先之内、不届之所業モ不少様相聞、氣毒之至候、此度兵隊入替申付、向後屹度隊中紀律嚴粛奉御守護ト様肝要之事ト、万一不心得之モノ於有之ハ、重ク咎可申付モノ也

益シ戰捷ノ餘弊ハ、何レノ国何レノ時ニモ有リ勝チノコトニシテ深ク怪シムニ足ラザルナリ

奇兵隊ハ三月十七日午前十時ニ吉田ノ陣営ヲ発シ、清末、長府ヲ経テ、午後三時ニ馬関ニ着シ、極楽寺、阿弥陀寺ノ両所ニテ休憩シ、五時頃ヨリ順次ニ華陽丸ニ乗込ミ、薄暮ニ至リテ全部乗船ヲ了リタルガ、華陽丸ハ其夜半ヲ以テ解纜シ、途中別ニ甚タシキ障リモナク、廿日ノ朝大時ニ兵庫ニ到着シタリ、因ツテ余ハ福田侠平ト共ニ直チニ陸ニ上リ、豫テ当地ニ滞留シタル時山直八ニ逢フテ、大坂ニ於ケル舎営其他ノ打合セヲ為シ、十時ニ再ビ兵庫ヲ出帆シテ、十二時ニ夭保

山沖ニ入リ直チニ上陸シ、舍營ノ見分等ヲ為シタル上、明朝ヲ以テ全隊ヲ陸揚ゲスルコトニ決シ、其旨ヲ船中ニ報知シタレバ、奇兵隊ハ翌朝五時頃ヨリ天保山ノ砲臺ニ上陸シ、夫レヨリ大隊行軍ニテ東シ寺町ニ至リ、各其ノ舍營ニ就キタリ

奇兵隊ガ他ノ諸隊ニ比シテ精練ナルノミナラズ、其ノ紀律モ亦頗ル嚴肅ナリシコトハ、余ノ自カラ信ジ且ツ誇ル所ナリシモ、其ノ上國ニ出張スルハ今回ガ初メテニシテ、加フルニ其ノ出張タル、先キニ出張シ居タル諸隊ノ、不紀律ニシテ交代ヲ要スルヨリ起リシコトナレバ、余ハ馬関乘船ノ当初ヨリ特ニ紀律ノ

船中掲示

勵行ニ注意シ、船中ニ於テモ已ニ左ノ掲示ヲ為シ

一 長官ヨリ申渡シ之事件、謹而可相守ル事

一 毎朝起鼓ヲ発シテ起キ、夜中寢鼓ニ後、此度可為整粛事

一 高声号呼、一切禁之

一 一隊一伍宛、輪次可為当直事

一 繫船之節、勝手ニ揚陸不相成ル事

一 甲板上ニ、猥ニ往来不相成ル事

舍營掲示

火坂ニ着シテ舍營ニ就クニ及ビテハ、更ニ又左ノ掲示ヲ為シタリ

一 兼而定置処之軍令条、規則之趣堅ク守ルベキ

原注 五十ノ員休憩日ナリ即チ今ノ日曜日ニ略同ジ

事

一 毎月五十之日、誓古止之事

一 毎朝六ツ時起鼓ヲ発シ盥嗽、五ツ時ヨリ四ツ時迄火小磯手継之事

一 夜五ツ時寝鼓以後、此度厳粛之事

一 各隊々々ニ於テ、毎日分隊宛、輪次当直、諸事長官之指揮ヲ受、其日之事務ヲ相共、出入ヲ紀スベキ事

一 夜中一伍宛、不寝番之事

一 各隊一伍宛、輪番ニシテ夜中諸陣屋廻見、尤銃之事

一 陣門暮六ツ限、夜行一切禁之

一 外出一隊四人宛、尤同行之事

但外出之節ハ、本陣当直座ヱ届出ル事

一 陣中ハ勿論、假令陣外タリトモ、砲声一切不相成ル事

一 高声号呼、一切禁之

我々ノ出張先キハ勿論京都ナレドモ、已ニ大坂ニ着陣シテ見レバ、直チニ京都ニ前進シ難キ事情モアリ、而シテ暫ラク大坂ニ滞陣スルコトニナレバ、同ジ東寺町トハ云ヒナガラ、成正寺(六番小隊)、三、四砲隊(蓮興寺、三番小隊)、四番小隊(妙福寺)器械方病院(智源寺)本陣

大鏡寺(一番小隊)、二番小隊(天德寺)(會計方)、小荷駄方、郷侠組(栗東寺)(総督)龍福寺(五番小隊)、一、二砲隊ノ八個所ニ分散シ居リテハ、種々不便ナル事少ナカラザルヲ以テ、廿五日ニ全部赤門屋敷ニ轉陣スルト同時ニ、桂権吾ヲ京都ニ上セテ宿舎ノ選定ヲ為サシムル等、多忙ノ中ニ数日ヲ経過シタルガ、余ハ乍チ京都ヨリノ召命ニ接シタルヲ以テ、南野一郎外ニ三名ヲ従エ、廿八日ニ大坂ヲ発シテ京都ニ赴キタリ

京都ニ於テ廟堂ノ人々ト會見シタル後、情勢視察ノ為メ、急ニ関東エ下向スベキ旨ヲ仰セ付ラレタルニヨリ、余ハ福田ヲ伴ヒ行カント欲シ、折柄帰阪ノ桂権

吾ニ託シテ、其事ヲ奇兵隊ニ申遣ハシタルニ、福田ハ直様上京シタルヲ以テ、四月三日両人ニテ京都ヲ出発シ、東海道ヲ下リタリ

駿府ニ於テ、当時恰カモ同処ニ御滞陣中ナリシ有栖川総督宮殿下ニ拝謁シ、京師ノ状況并ニ余ガ今回派遣セラレタル所以ノ旨趣ヲ上陳シ、参謀某ニ面會シテ、一應幕賊ノ状勢ヲ聞キ、王師已ニ函関ヲ踰ヘタルヲ知リテ、稍心ヲ安ンジタリト雖ドモ、尚事情ノ分明ナラザルモノ多キヲ以テ、先鋒ノ参謀西郷吉之助ニ逢フテ親シク聞ク所アラント欲シ、進デ江戸ニ至ル

ノ都合ヲ打合セタリ

途中函根ノ関ヲ越ユル時、拙吟二首アリ、茲ニセヲ挿入ス

越へかやむさこねのこさか雨はれて関のあちこも月まかり行

佐守るところハこゝと関すゑし箱根も今ハ名のみかりけり

余ノ江戸ニ到着シタルハ何日ナリシヤ、今セヲ記臆セザレドモ其日直チニ西郷ヲ芝増上寺ノ陣営ニ訪問シタル時、西ノ丸ノ受渡シガ四五日前ニ濟ミタル由、西郷ヨリ話シノアリタルコトハ、確カニセヲ記臆セリ而シテ記録ニヨレバ江戸城ノ受渡シガ行ハレタルハ則チ四月ノ十一日ナルヲ以テ恐ラク其月ノ十五六日ナリシナルベシ余ハ江戸ニ着シテ取敢ズ高輪ノ一旅亭ニ投ジタルガ品川沖ニハ幕府ノ軍艦七八隻碇泊シ居リテ甚ダ壮観ナリキ城ノ受渡シハ已ニ濟ミタレドモ、幕府旗下ノ士其他諸浪士ノ、種々ノ隊伍ヲ組織シ、幕府ノ恢復ヲ謀リテ

暴発セントスル者、到ル処尚太ダ多ク、殊ニ上野山内ヨリ下谷ニカケテハ、是等ノ党徒最モ多ク徘徊シ居リ、勤王藩士ノ路傍ニ暗殺セラレタル者モ鮮ナカラズ、此際ニ当リテ普通ノ民家ニ止宿シ居ルハ、極メテ危険ナルヲ以テ、宜シク直チニ山内ニ来リ宿スベシト、西郷ヨリ懇篤ナル注意アリ、因ツテ余ハ即日当時長州兵ノ陣営トナリ居タル青松寺ニ引移リタリ

当時西郷ノ談話中、今ニ至ルマデ記シテ忘レザルノ一笑柄アリ、即チ敕使ノ随員トシテ江戸城ニ臨ミタル時西郷ノ当惑シタル奇談ナリ、蓋シ当時ノ作法トシテ、城ニ入リテ己ニ式台ヲ上レバ、勿論佩刀ヲ脱セ

ザル可カラズ、而シテ國主大名ノ格アル者ニ非レバ、其ノ脱シタル佩刀ヲ手ニ提ゲテ奥ニ入ルコトヲ得ザリシナリ、西郷ハ自カラ顧ミテ其ノ佩刀ヲ手ニ提ゲルノ穏当ナラザルヲ思ヒタレドモ、去リトテ之ヲ人手ニ渡シテ、丸腰ニテ殿中ニ深入リスルモ、亦頗ル危険ナルヲ惑ジ、当惑ノ末、之ヲ抱キテ用意ノ書院ニ通リタル由、己ニ主師ヲ将ヰテ江戸ニ入リ、徳川氏ニ命ジテ其ノ城池ヲ明ケ渡サシムルニ至ル、通常ノ人ナラバ、國主大名以上ヲ以テ自カラ擬シ、手ニ佩刀ヲ提ゲテ書院ニ通ルガ如キ、寧ロ其ノ得意トスル所ナルベキモ、西郷ハ則チ然ラズ、困シテ佩刀ヲ抱クニ至

レリ、是レ即チ西郷ノ西郷タル所以ナリ

近日西郷ガ此年四月四日付ニテ或ル人ニ贈リタル書翰ノ寫シヲ見タルニ、中ニ左ノ一節アリ、曰ク

明五日ヨリ一七日之間ニ、城引渡、軍艦銃砲之所モ、十七日限相納候節(様)ノ誤ナルベシ)御達御座候付、必相違ハ有御座間舗儀ト奉存候、乍然、油断者不相成候、私ニモ御供ニテ城内ニ入込候処、参謀ハ玄関ヨリ裏ヘ罷通候様承候故、直様書院ヘ加持ナガラ坐ヘ附、陪臣之ケ様之為体、初而之事歟ト、跡ニテ大物笑ニ而御座候(候)右ノ加持ナガラト アルハ、察スルニ加抱ナガラノ誤寫ナルベシ、何トナレバ刀ヲ提ゲ

テ悠然トシテ書院ニ通リシナラバ跡ニテ大物笑ナドミノ文句ハ出ル筈ナケレバナリ、聞ク処ニヨレバ一本ニハ加持ナガラノ字ヲ、加為持ト寫シアル由、是レハ思フニ乍抱ト草書ニテ認メアリシヲ、謄寫ノ際ニ讀ミ誤リシ者ナラメ乎

余ハ滞留中、屡西郷ノ宿舎ニ至リテ、形勢ヲ聞キ合セタルガ、前将軍家ハ謹慎恭順、只管ラ朝命ヲ奉セラレツヽアルモ、幕府旗下ノ士及ビ近藤勇其他浮浪ノ徒ハ相團結シテ、朝命ニ抗スルノ議論ヲ唱ヘ、其勢ヒ頗ル激烈ニシテ、容易ニ鎮撫スベカラザルノ狀アリ、加フルニ軍艦ヲ将ヒテ品川沖ニ碇泊シ居レル榎本等

モ其軍艦ヲ朝廷ニ差出スコトヲ肯ンセスシテ種々ノ異議ヲ主張シ、勝海舟、山岡鐵舟ノ両人ガ、其間ニ立チテ周旋尽力ヲ為シ、屡西郷ニ面會シテ、朝廷ト幕府トノ為メニ肝膽ヲ砕クノ模様ハ、我々ガ曩キニ防長国内ニ割拠シ、内外ニ對シテ十死一生ノ困苦ニ遭遇シタル当時ノ事情ヲ眼前ニ描キ出シ、一種云フ可カラザルノ感慨ヲ喚起シタルコト、其ノ幾回ナリシヲ知ラザルナリ但シ上野其他ニ集シ居タル諸團隊ガ矢朝ニ抗敵シテ幕府ノ命脈ヲ維持セントスル決心ハ頗ル強固ニシテ後チニ上野ノ戦争ヲ見ルニ至リタルノ兆候ハ当時ニ於テ已ニ顕然タリ次シ

テ偶然ニ非ザルナリ

余ハ斯クテ江戸ニ滞留スルコト、十有餘日ニ及ビタリシガ、奇兵隊ハ其間ニ於テ越後ロ出征ノ命ヲ蒙ムリシ由ニテ、厚東次郎助ヲ急使トシテ余ノ帰京ヲ促ガシ来レリ、而シテ長府ノ報国隊ノ軍監福原和勝モ、厚東ト同道シテ江戸ニ来リ、報国隊ガ奇兵隊ト同ジク、越後ロ出征ノ命ヲ受ケタル由ヲ語リタリ、蓋シ奇兵隊ハ北月十日ノ晩ニ、川船ニテ大坂ヲ出発シ、十一日ニ伏見ニ上陸シテ、直チニ入京シ居タルナリ

因ツテ余ハ西郷ニ告別シ、併セテ将来ノ畫策ヲ談合シタルニ、折節西郷モ亦上京ノ命ヲ受ケ居ルヲ以テ、

幸ヒ同行スベシトノコトニテ、廿九日ニ品川湾ヨリ共ニ薩州ノ蒸汽船(豊瑞丸ナリシト覚ユ)ニ乗リ込ミ、途中風波ヲ伊豆ノ伊東ニ避ケテ、閏四月ノ五日ニ大阪ノ川口ニ着シタリ

当時西郷ノ上京ヲ要シタル用向キハ、徳川氏ノ為メニ新タニ封土ヲ定メ、人心ノ疑惧ヲ去ルコト、第一ニ居リシナリ、而シテ徳川氏ノ新封土ニツキテハ、勝等ヨリハ百万石ヲ哀求シ、西郷ハ七十万石ヲ與ルノ説ナリシト記臆ス

江戸滞留中ハ勿論、船中ニ於テモ、西郷ノ談話ハ、余ヲシテ利益ヲ得セシメタルモノ、若クハ興味ヲ感セシ

メタルモノ少ナカラズ、一日諸藩ノ情勢ヲ談論シテ遂ニ近世人物ノ評論ニ移リタル折、西郷ハ頻リニ藤田東湖ノ、近世罕ニ見ルノ人物ナリシコトヲ称揚シ、因ツテ話リテ曰ク、昔年水戸ニ遊学シタル時、屡東湖先生ニ面會シタルガ、先生ハ議論縦横ニシテ決断ニ富ミ、而カモ胸襟磊々落々トシテ、大事ヲ論ズルニ当リテモ、更ニ左右ヲ顧盻スルノ状ナク、真箇ニ大丈夫ノ資質ヲ備ヘタリ、然レトモ其ノ最モ及ブ可カラザルハ、先生ガ如何ナル場合ニ於テモ、切先キ三寸ヲ秘シテ、決シテ人ノ窺フヲ許サザリシコト是ナリト、東湖ノ英雄タリシコトハ、已ニ公論ノ決スル所ナリト雖

トモ、英雄ノ英雄ヲ評シタル、其味、亦自カラ別ナルモノアリト謂フベシ

余ノ大坂ニ帰着シタル時ニハ、奇兵隊ハ已ニ疾ク京師ヲ出発シ居タルガ、余ハ四月廿三日付ニテ、北陸道鎮撫総督参謀ヲ仰付ラレ居タリ、蓋シ此時ニ当リ、會津ノ賊軍勢益ス猖獗ニシテ、奥羽ノ列藩殆ンド皆ナ之ニ合スルノ状アリ、因ツテ

朝廷ニ於テハ、更ニ北國路ヘ兵ヲ出シテ、奥羽ノ官軍ニ應援セシムルノ議ヲ決セラレ、四月ノ十四日ニハ、薩州、長州及ビ佐土原ノ三藩ニ、十五日ニハ加州、藝州ノ両藩ニ、十八日ニハ長府、富山ノ両藩ニ、夫レ〳〵出兵ヲ命ゼラレタリ、但シ此ノ出征軍ノ主カトナルベキモノハ、勿論薩、長両藩ノ兵員ナルヲ以テ、其ノ参謀ノ如キモ、両藩ヨリ各一人ヲ採用セラレ、薩州ノ黒田了介ト、長州ノ余ト両人ニ之ヲ命セラレタルナリ、当時朝廷ヨリ長州侯ヘノ御沙汰ニ曰ク

四方ニ人数差出ル儀ニハ得共、松平肥後益暴激ニ募リ官軍ニ抗シ候、相聞ルニ付、北国路ヘ人数

差向ケ、奥羽ノ官兵ヘ應援致ル様、御沙汰ル事
之ニツキ、長州侯ヨリ奇兵隊ヘノ御沙汰ハ尤ノ如シ
今般別紙寫ノ通リ、従朝廷御沙汰相成ルニ付、出張
被仰付ル条、諸事御不都合無之様、屹度勉励可致ル
事

余ハ大坂ニテ江戸ノ情況ヲ報告シタル後出発ニツ
キテノ準備ヲ為シ、及ビ出征軍ニ對スル後方ノ任務
等ニツキテ、藩ノ有司及ビ有力者ト協議ヲ為シ七日
ハ夜ヲ以テ上京、直チニ越後ニ向ヒタリ、益シ此時ニ
ハ主上恰カモ大坂ニ御臨幸中ニテ、廟堂ノ大官ハ
勿論諸藩主諸公卿モ亦多ク扈従シ奉リ居リ、相談事

ヲ為スニハ、京都ヨリモ大坂ノ方都合好カリシヲ以
テナリ松菊木戸先生ノ戊辰日誌ヲ閲スルニ、閏四月
七日ノ条ニ

于時山縣狂介来ル、共ニ〻〻内外ノ事ヲ論ジ、益ス
御國ヲ一定スルノ事ヲ急ク、三人等（松本鼎三、中
村芳之助、赤川敬三ナリ）御本陣ニ出、狂介ト大略前
策ヲ論定シ、彼モ亦去、（中略）薄暮ヨリ挙テ河佐ヘ轉
ズ、山縣狂介、松本鼎三尋来、狂介自「今上京、直ニ到越
後、依テ来リ告」別

亦以テ当時ノ状況ヲ想見スベキナリ

余ハ戰地ニ向フテ出発スルニ先ダチ、福田侠平ヲシ

テ急キ國元ニ帰ラシメタリ、是レハ北陸ノ敵情未ダ分明ナラズト雖モ、万一賊軍優勢ニシテ、容易ニ之ヲ破リ難キニ於テハ、訓練ノ十分ナラサル諸藩ノ兵隊ヲ以テ、大戰ヲ屢スルコト太ダ困難ナルベク、而シテ当時ニ於テ先ヅ精兵ト云フコトヲ得ベキ薩長ノ兵員ハ、合セテ千人ニ過ギズシテ、迚モ久シク大敵ヲ一手ニ引受クルニ足ラズト思ハレタルヲ以テ、兎ニ角長州ノ兵隊、特ニ奇兵隊ノ残部ヲシテ、北越ニ来會セシメザル可カラズト思惟シタルノミナラズ、輜重ニ関スル後方ノ任務ニツキテモ、亦國元ノ当局者ト打合セヲ為スベキモノ多々ナリシヲ以テナリ

余ハ閏四月ノ廿日頃ニ、越後高田ノ城下ニ於テ出征軍ニ追ヒ付キタルガ、出征軍即チ薩州兵四百人、長府兵二百人及ビ奇兵隊ハ、四月廿五日ト廿六日ノ両日ニ京都ヲ出発シ、翌月十九日ニ高田ニ到着シ居タリシテ薩長両藩ハ、出發ノ当日ヨリ、合併シテ會議所ヲ設ケ、双方ノ重ナル者此処ニ會シテ協議ヲ為シ、以テ全軍ノ統一ヲ計リタルガ、余ノ未ダ着陣セザリシ間ハ、時山直八(京都出発ノ日ヨリ、故アリテ玉江三平ト改稱セリ)ガ余ノ代理者トモ云フベキ地位ニ立チ、薩ノ黒田ト談合シテ軍務ヲ處理シ、途中越前、加賀等ノ諸藩ヲ御ヘテ、之ヲシテ朝廷ノ為メニ北越出征

是等ノ兵隊ヲ繰リ出サシムルコトニ尽カシタリ、而シテ富山兵ト共ニ先ヅ進ンデ米山峠ノ険ヲ取リタリ、又高田藩ノ如キモ、先キニハ賊徒ノ其ノ領分ヲ通過ン僅カニ一通ノ詔書ヲ取リテ之ヲ許シタルガ如キ、不信州松本辺ヘ行クヲ拒止セズ、曖昧ノ懸合ヲ為シ、都合ノ挙動アリ、朝廷ヨリ御不審ヲ蒙ムリテ、至急重役ノ者ヲ出京セシムベキ御沙汰ヲ蒙ムリン程ナルニ拘ラズ、今回王師ノ到着シタル頃ニハ、藩論ヲ挙テ勤王主義トナリ、先鋒トシテ出兵ヲ為スニ至レリ

一般方略

此時ニ当リ尾州、松代、飯山等ノ兵ハ幕府ノ脱兵ヲ飯山城下ニ破リ進ンデ荒井驛ニ駐陣シ居タルガ余ハ高田ニ於テ敵情報告ヲ検考シタル後チ、黒田ト協議ヲ為シテ、作戦計画ノ概要ハ左ノ如シ、曰ク、會津兵ノ先鋒ハ小出島ニ陣シ、桑名兵ノ先鋒ハ鯨波ニ在リ、海道ト山道トニタ手ニ分レテ、上國ニ進軍セント企圖セリ、因ツテ官軍ヲ両道ニ分チ、支隊ハ小出島ヲ陥落シ、直ニ進ンデ小千谷ニ至リ、信濃川ヲ渡リテ榎峠ノ険ヲ占領シ、長岡城ヲ攻撃スベシ、而シテ本隊ハ柏崎ニ出デ、支隊ト相應ジテ長岡城ヲ夾撃スベシ、長岡城陥落ノ上、更ニ軍議ヲ定メ

テ、神速ニ新潟ヲ攻撃シ、之ヲ占領スルニ至レハ、自餘ノ小藩ハ、一弾ヲ費ヤサズシテ、自カラ降服スベキナリト

是ニ於テ、支隊ハ松山越千手方面ニ向ヒ、本隊ハ柏崎口、青海川方面ニ向ヒ、夫レゝ高田ヲ出発シタルガ、支隊ハ小千谷ニ入リ、本隊ハ柏崎ニ入ルマデノ途中ニ於ケル戰爭ニツキテハ、五月朔日付ニテ薩長先鋒ヨリ差出シタル届書ニ、其ノ概要ヲ載セアルヲ以テ、茲ニ之ヲ抄出スルコトヽスベシ

一 閏四月十九日、薩長之兵高田着陣、探索ノ敵情ニヨリ、直様戰畧ヲ定メ、先達以来荒井駅滞陣ノ尾州以下信州諸藩ノ兵ニ、薩長、高田ノ兵相添ヘ、松山越千手邊ヨリ出張、加州、高田ノ兵ニ薩長ノ兵相添ヘ、柏崎口、青海川邊ヘ出張ス

一 同月廿四日、薩州一小隊、長州二小隊、松代一小隊、飯山一小隊、尾州一小隊、千手ヨリ千曲川ヲ渡リ、十日町ニ押出ス、廿五日、曉、路ヲ分ツテ六日町ニ進ミ入ルニ、賊一人モ不見、昨日小出島ノ方ヘ逃去由ナリ、夫ヨリ尾兵ヲ陸路ヨリ進メ薩、長ノ兵ハ、川舟ニテ浦佐ニ至リ、直様大庄屋ヲ樣原峠ニ進マシム、廿六日、薩州半小隊、飯山一小隊、尾兵ニ合シテ堀内ニ進ム、廿七日、曉八ツ時過、大雨ヲ侵シ、薩

半小隊、長二小隊ヲ以テ、浦佐ヨリ魚沼川ヲ渡リ、賊ノ斥候ヲ追散シ、直ニ小出島ヲ攻撃ス、賊駅口及ビ川堤ニ假砲臺ヲ設ケ烈シク防戰、薩、長、之兵両道ヨリ奇正互ニ進ミ、佗梨川ヲ渡リ市中ニ突入シ、激戰シテ遂ニ小出島ヲ破ル、堀内ノ兵ハ、川向ヨリ四日市ノ賊ニ当リ、薩、長ニ應援ス、賊悉ク會津道六十里越ニ走ル、乃チ四日市ニ飯山之兵ヲ、小出島ニ松代之兵ヲ備ヘ、餘ハ堀内ニ引揚固守ス、此戰曉六ツ半時ヨリ一小時間餘ナリ、薩、長討死九人、手負二十人、尾州手負一人、姓名別ニ具ス、賊ノ死傷ハ、餘程多分有之様相見候

一　同廿六日曉、尾州、松代、松本、高田等ノ兵、千手ヨリ小千谷ニ進ム、賊雪峠ノ險ニ拠リ、山腹ニ砲台ヲ設ケテ防禦ス、官軍四ツ時前ヨリ七ツ半頃マデ攻撃、松代ノ兵峰ヲ踰ル故、賊敗走、山上ヨリ大砲ヲ発シ、ル得共、官軍終ニ山上ニ押登リ、賊小千谷ノ方ニ走ル、此時夜五ツ時也、

一　同廿七日曉、小千谷ニ至ル、賊已ニ長岡ニ走ル由ニテ、一人モ無之、官軍代ツテ陣屋ニ入ル、官軍死傷十人許、姓名未詳、賊路傍ニ仆レ居ル者一人、生捕四人、其外死傷多ク相見ヘ候

一　同廿七日、薩州一小隊、長州二小隊、海道ノ官軍ハ同

隊、加州一小隊、二砲門、高田一手、前夜ヨリ申合、未明鯨波前七八丁マデ押出シ居ル処、加州、高田ノ兵未来ル故、援兵ト定メ置ク薩、長ノ兵ヲ以テ、直ニ鯨波ヲ攻撃ス、賊駅口ニ邀戰ヒ、終ニ不能支、人家ヲ自焼シテ走ル、薩、長追撃シテ鯨波駅外ニ至ル、高田、加州ノ兵追々来リ加ハル、賊柏崎ノ前、右手ノ山ニ依リ、松林ヲ楯トシ烈シク防戰、山下ハ水田ニテ、是日大雨如傾、溪水暴漲、薩、長半隊ヲ以テ勇進、其山ヲ奪ヒ、直ニ萬神堂ヲ攻ントス、加州勢継カズ、且ツ兵疲ル、ヲ以テ、鯨波ニ引揚ル、今日長州討死二人、手負七人、高田討死三人、手負八人、加州討死六人、手負廿四人、

姓名別ニ記ス

一 同廿八日、桑名、水戸之賊及ビ歩兵等、昨夜ヨリ柏崎ヲ捨テ逃去ル様子相聞ル ニ付、官軍進デ柏崎ニ入リ要地ヲ占拠ス、賊一二里外ニ盤踞シ、斥候三四十人ヲ出ス、官軍撃テ之ヲ退ク

此届書ハ、柏崎ノ會議所ニ於テ調製セラレタルモノナルガ、余ガ当時其ノ寫シニ添ヘテ、京都ナル廣澤兵助ノ許ニ送リシ書翰ノ、偶然、毛利家ノ編輯処ニ保存セラレ居リシヲ以テ、近日之ヲ借覧シタルニ当時ノ状況ヲ推想スルニ足ルベキモノアルヲ以テ、茲ニ之ヲ挿入スルコト、セリ

拝呈仕、御國之近況さらゝ不相分処、打續御尽力
不少と奉存、陳当境も先日来追と諸勢進入、二十
七日ゝ至り、てハ、両口とも爭戰ゝ相成、孰も手際
能打破、別書供貴覧、先鋒を爭、勢死傷餘分有
之、何とゝ遺憾不少ゝ、此辺ハ御推察被下度、さりゝ
ゞら西國男児之気象、一時東隅ニ鳴し可申奉存、
此後ハ小千谷を根拠トゝし、長岡城へ討入、覚悟
御座、柏崎口ハ何分険岨ニて、一騎当千之所のミ
多く、迚も海軍ゝからでハ難進事と奉存、千時軍艦
来港無之、甚拙念、猶軍機を失ひ、半と日夜痛心仕
、鴻城物議差起り自然隙取不申哉と、人しらず之

焦慮も、亦多少御憐察可被下、京師詰居上、京、之醫
師両人、何卒御繰合出張之儀、御配慮奉願上、寺内
君其外へもよろしく御鳳声、梅雨中別て御自重、為
國家専祈仕、匆々拝啓

後四月二十九日

猶保治へも、御序宜敷御鳳示奉願、甚申兼ゝ得
共、四五十金位之時計、待者御命ジ御買得被成下、
急速御送ラセ奉願ゝ、持拙リ之分打破、甚困窮、此
近邊ニハ柱時計スラ無之位、御垂憐可被下ゝサ
シ付ゝ儀、御海漁ヨロシク奉願上、ゝ、猶柏崎口ハ、
加州勢之狼狽ヨリ、我兵之先登ヲ討ゝナド仰天、

榊原ハ却テヨク働ハ、此模様ニテハ、有限両藩之兵ニテ無限賊ヲ討ハ事ニ、兵員ハカゲヌ様カタチバナラヌト、甚痛心仕ハ、就テハ京師御守衛之兵無之テハ、御繰出シノ御目途モ相立兼、只今ヨリ援兵之儀ヲ申上置ハニハ無之、會賊之巣窟ハ両藩兵ヨリ外ハ引当ニハ相成不申、御合被成置、宜御斟酌被下ハ様、奉願上ハ、頓首柏崎、小出等、既官軍占拠之場所ニ相成ハ処、手之下差閊ハ民政ナリ、功者之人物一(御両藩人)御差出、御目途此ト相立ハ様御頼仕ハ間、急務ナラン(不明ナレドモ原文ノ侭ニナシ置ク)

璋岳老臺　　素狂

執事

敵地之形勢、味方之情態等、筆紙難盡、厚東次郎助俄ニ差越ハ間、何事モ御聞取、宜敷御裁断奉仰ハ、催促カマシクハ得共、海軍来港無之ニハ、隨分困窮仕ハ、ヨキ御分別可被成下ハ、猶戰争概略一通、御國ヘ御序奉願上ハ、不取敢要詞ノミ、副啓仕ハ、匆々

五字時

五月朔日

二白甲府、駿府等ヘ賊徒蜂起之風声、素ヨリ虚説ニテ可有之ハ得共、人心ハ余程関係仕ハ、東西之

形勢等、次郎助へ御申含可被下ハ、以上

素狂拝

障岳老丈座下

内呈

山道ノ支隊已ニ小千谷ニ入リ、海道ノ本隊亦柏崎ニ入リテ、双方ノ間始メテ連絡ヲ通スルコトヲ得タルヲ以テ、便チ柏崎ヲ本営ト定メタルガ、小千谷ヲ棄テ、走リタル會津ノ賊軍ハ、片貝地方ニ在リ、柏崎ヲ棄テ、走リタル桑名ノ賊軍ハ、妙法寺ニ在リ、而シテ水戸ノ賊軍ハ出雲崎ヲ根拠トシテ椎谷付近ニ在リシヲ以テ、取リ敢ヘズ之ヲ掃蕩スルノ必要アリ、因ツテ

片貝地方ノ賊ハ、小千谷ヨリ兵ヲ出シテ之ヲ攻撃シ、妙法寺及ビ出雲崎方面ノ賊ハ、柏崎ヨリ兵ヲ出シテ之ヲ攻撃スルコトニ決シ、片貝ノ賊ハ、五月ノ三日ニ、妙法寺ノ賊ハ同六日ニ、孰レモ多少ノ苦戦ヲ以テ、之ヲ撃退スルコトヲ得タリ

山道ノ兵ト海道ノ兵トハ、是ニ至リテ豫テノ作戦計画ニ従ヒ、應サニ相應ジテ長岡城ヲ夾撃スヘキ場合ニ到着シタルガ、長岡藩ハ、是ヨリ先キ五月ノ二日ニ、其ノ重役河井継之助ヲ小千谷ノ陣営ニ遣ハシ、官軍ガ長岡ノ領内ヲ通過スルコトナキ様請願ヲ為シタリ、而シテ其ノ理由ハ、目下闔藩ノ人心紛擾ヲ極メ居

り、之ヲ鎮撫スルヿト容易ナラズ、万一官軍ガ領内ヲ通過スルニ於テハ、或ハ不慮ノ変アランコトヲ虞ルト云フニ在リ、当時小千谷支隊ノ指揮ニ任ジ居タル（軍監岩村精一郎（男爵高俊氏ナリ）及ビ薩ノ渕邉直ハ右衛門ト長ノ白井小介トナリシガ、長岡藩ノ人心紛擾ノ故ヲ以テ、我ガ進軍ヲ中止スルコトハ、到底行ハルベキト話シニ非ズ、我レハ是非トモ長岡領ヲ通行スベキニヨリ、若シ之ヲ拒マントナラハ、宜シク兵馬ノ上ニテ相見ルベシトテ、断然、河井ノ請願ヲ郤ケタル由

河井継之助ガ小千谷ニ来リタルコト、及ビ其時ノ應

對振リ等ニツキテハ、近年刊行ノ請書ニ記スル所、互ニ異同アリ、一々信ヲ措クニ足ラザルノ状アルヲ以テ誠ニ「長岡藩戦争之記」ヲ按スルニ、左ノ如ク記シアリ

曰領一里之外、曰會之陣屋跡、小千谷ト申所、御宿陣ニ相成、御総督府ノ御役員モ御出張之趣、相聞ハニ付、五月朔日、用人花輪彦左衛門ヲ以テ、重役之者歎願ノ為メ拝謁致度之旨、相伺ハ処、御聞届被下ハニ付、翌二日河井継之助罷出、願書差上ハ得共、御披見モ不被下、御差戻相成、情実申遂、精々及歎願ハ得共、一切御取合不被下、何ト可致様モ無之、同所出張之

藩ヘ倚頼致ル得共、是亦相断リ、時刻移リ、同所ニ一泊、翌日罷帰リ、其段申達、種々議論ヲ尽シル得共、云ヘ、

而シテ其ノ所謂ユル嘆願書ナルモノハ、即チ左ノ如シ

去卯ノ十月、徳川氏天下之政権被致奉還ル節、今日ノ勢ニ可至ト、悲歎ノ餘リ、不顧疎賤、不憚忌諱、上京献言仕、退而徳川家ヘモ忠諫仕度段、以書取相伺、御聞濟之上、十二月廿八日京地出立、翌廿九日下阪仕ル処、城内物騒敷、早速入城モ不相叶、当正月朔日昼頃ニ至リ、漸々重臣之者、入城届仕ル処、彼是混雑、其

辺ニ至リ兼、二日三日ト相成ルテハ、既ニ如何共不可致模様柄、万民ノ艱苦忽チ可生ハ、眼前相分ル得共、何ト可仕様モ無之、尤上京前、徳川政令ノ不治ト、当日ノ形勢ト、一二執事之者ヘ申出ル得共、其段モ届兼、猶又下阪ノ上、得ト諫爭仕度奉存ル処、前件之次第柄、只々歎息罷在ル得共、謂レサル取始末、不忍見聞事而已ニテ、致方モ無之、此上ハ封土之人民ヲ撫安仕ルヨリ外無之ト、無拠帰邑仕ル、当春ヨリ徳川家御追討ノ御命令有之ル得共、臣トシテ君ヲ諫ムルハ可有之、諫爭モ不仕、忘恩義、累代之君ヘ鋒ヲ向ケルハ、大逆無道、忍

而可為之哉、方今諸侯伯ノ所業、辯論ヲ不待、日本國之人理葉絕ニ至リ、何ト可申樣無之、是等之人々何程御味方仕ル共、格別御為ニモ相成間敷歟、德川家ハ前後条理モ不相立、終ニ今日ニ至リ以次第、日夜苦心罷在ル得共、諫爭之誠意モ不貫、微力之不可濟處ニハ得共、何樣憂慮仕ルモ致方無之、微小之弊邑ニ御座ル得共、人民十万餘モ有之ル得共、右之者共ヲシテ、職業ヲ勵マシ、財用ヲ足シ、四民ヲ安ンジル平ヲ以テ、天職ト心掛居ル外、他事無之、慎デ天下ノ治ヲ相待、乍不及應分ノ御奉公可仕心底ニ御座ル、尤表ニ忠義ヲ唱ヒ、内實ハ割拠傍觀仕ル樣ナル儀ハ、

他ニ有之ルモ可恶、処ニテ、其辺ハ申訳仕ル迄モ無之、一毫之求ナク、誰人ニ有怨ニモアラズ、御威力ノ十一ニ不当ハ、愚昧之者モ相分ル儀ニ御座ル得共、義理ヲ守リ、天職ヲ尽シ、滅亡仕ルハ、天命ト明ラメ、覚悟モ可極ル得共、彼是之強弱ヲ計リ、二心ヲ懷キ、不義之名ヲ以テ隣國ノ兵禍ヲ受、領民ヲ苦メ滅亡ヲ取リ、汚名ヲ後世ニ殘シ候テハ、申訳モ無之、衷情御洞察被成下ル樣、仕度奉存ル、方今海外ノ諸國、互ニ富強ヲ計リ、嘉永癸丑渡来ヨリ之所業、御承知被為在ル通、申上ル迄モ無之、歎息罷在ル処、自國之爭乱不止之勢ト相成ル迄ハ、行末之処深ク御察事申

上ハ幾ニ御座ハ、微小ノ弊邑ニテモ、用ヲ節シ倹ヲ勤メ、両三年中ニハ、海軍用意モ可仕ト、一同勉励仕ハ処、斯ル形勢ト相成、乱ヲ濟フニ補ナク、徒ラニ領民ヲ苦シメ、農事ヲ妨ケ、疲弊ヲ極メルトテハ、可悲事ニ御座ハ、万死ヲ犯シ、朝廷ヘ奉献言、無其詮、徳川氏ヘ申立ハモ無其益、進退失途、只領民ヲ治ムルヲ以テ天職トナシ暫清時ヲ待之心事、宜敷御憐察モ被成下ハバ、此侭被差置度、不然バ民心ノ動揺、大害ノ所生、幾重ニモ御赦免奉願ハ、独一領一国之為ノミニテ、申上ハニハ無之、日本國中快和合カ世界ヘ無恥之強國ニ被為成ハバ、天下之幸不過之、事迫

附紙
二百十日間
ニ小千谷ニ於
ケル長岡進
撃ノ軍
議ヲ脱略
セリ

リ情切、愚誠之程御採用ニモ相成リハバ、雖有奉存ハ、恐惶恐懼謹言、慶應四辰年五月、牧野駿河守

右「戰爭之記」ハ維新後長岡藩ヨリ政府ヘ差出シタルモノニシテ、其ノ記スル所寧ロ精確ナルベシト思ハル

初メ河井継之助ガ乗ルコトニツキテ、小千谷ヨリ報告ノアリシ時、余ハ鬼ニ角之ヲ拘留シ置クベシトノ指圖ヲ為シタルニ、此ノ指圖ガ小千谷ニ達シタル時ニハ、河井ハ已ニ立チ去リ居タル由ニテ、余ハ窃カニ白井等ノ不用意ヲ遺憾トスルト同時ニ、小千谷方面ノ状況、頗ル懇念スベキモノアルヲ察シ、時山ヲシテ

余モ亦小千谷地方実況ヲ視察シ置ク他日指揮上ニモ都合ヨキヲ以テナリ

同方面ノ指揮ニ任ゼシメント欲シ、五月ノ十、日ニ、時山ト同道、同地ニ出向キタリ、然ルニ途中ニ於テ、榎峠ノ方向ニ当リ、激烈ナル銃声ヲ聞クコト頻リニシテ、接戦ノ正ニ酣ナルヲ知リタレバ、急キテ小千谷ノ本陣ニ着シ、質スニ榎峠ノ戦況如何ヲ以テスレバ未ダ何等ノ情報ニ接セズ、且ツ銃声ヲモ聞カズト云ヘリ、焉ンゾ驚カザルヲ得ンヤ、加之、余等ガ到着シタル時、恰カモ岩村以下ノ諸長官ガ晩餐ヲ為シ居タル、其ノ有様ヲ見レバ、銘々ニ膳ヲ控ヘ、剰ヘ人ヲシテ給仕セシメ居ルナド、殆ンド戦陣中ニ在ル者ノ所為トハ思ハレザルモノアリ、余ハ憤然トシテ彼レ等ヲ叱責シ、

急ニ斥候ヲ派遣セシメタルニ、豫テ榎峠ニ出シアリタル尾州、上田ノ二小隊ハ、敗ラレテ退却ヲ為シ、榎峠ノ要害ハ已ニ敵ノ為メニ占領セラレタリトノ事ナリ、因ツテ直チニ野村三千三ノ隊即チ奇兵隊五番小隊ヲシテ、尾州兵ト共ニ信濃川ヲ渡ラシメ、野村ハ榎峠ノ附近ニ至リテ、暗夜ニモ拘ラズ、兵ノ配置ヲ為シタリト雖ドモ、地理ニ精シカラザルノ容兵ヲ以テシテ、要害ニ拠守セル敵軍ノ前ニ進撃スルコトハ、之ヲ能クスベキニ非ラズ、勢ヒ防戦ノ手段ヲ取リテ、夜ノ明クルヲ待タサル能ハザリシナリ

官軍ノ不幸ハ之ノミニ非ズ、此頃ハ恰カモ梅雨ノ期

節ニシテ、陰霖已ニ連日ニ及ビ、信濃川ハ現ニ一丈八尺ノ増水ヲ為シ居リ、此上更ニ一二尺ノ増水ヲ見ルニ於テハ、到底舟ヲ渡スノ望ミナキナリ、此夕余ハ親シク渡河ノ実況ヲ見分シタルニ、濁浪怒號、満目蓁々トシテ、当ル可カラザルノ勢アリ、一隻ノ舟ヲ濟スニ、尚八人ノ水手ヲ要シ、而シテ兵士ハ僅カニ七八人ヲ載セ得ルニ過キズ、独リ出兵ノ困難ナルノミニ非ズ、糧食弾薬ノ運搬モ亦従ツテ太ダ渋滞セサルヲ得サルナリ

余ノ小千谷ニ来リタルハ、前記ノ通リ、時山ヲシテ同所ニ於ケル支隊ノ指揮ヲ為サシメンガ為メニテ、大

体ノ方略ヲ定メタル上ハ、直チニ柏崎ニ帰陣スルノ手筈ナリシモ、新カル意想外ノ事変ニ際會シタルヲ以テ、急ニ本営ニ帰ルコトヲ得ズ、其尽茲ニ滞在スルコトヽナレリ

斯クテ翌十八日ニハ、早朝ヨリ、川手前ナル三仏生ノ軍隊ヲシテ、川ヲ隔テヽ、砲撃ヲ行ハシメ、又能見兵吾ノ隊即チ奇兵隊四番小隊ヲシテ、薩兵其他ト共ニ川ヲ渡ラシメタリ、尤モ三仏生ニハ豫テヨリ松代、上田等ノ兵若干ヲ配置シアリ、是等ノ兵ハ、昨日モ川ヲ隔テヽ、砲戰ヲ為シタルナリ、而シテ其朝川ヲ渡リタル諸兵ハ、横渡ノ山上ニ拠リ居タル敵兵ヲ破リテ之ヲ

取リタルガ、榎峠附近ニアリタル官軍ハ、防戰益ス危
ク、或ハ敵ノ為メニ其後ヲ絶タレンコトヲ恐レテ、横
渡ニ進却シ、久我四郎ノ隊即チ奇兵隊二番小隊及ビ
長府ノ報國隊、松代兵等、更ニ之ニ赴援シタリ、而シテ
余ハ事情ノ極メテ重大ナルモノアルヲ思ヒ、尚此方
ヘ多少ノ人員ヲ繰リ出スベキ樣、柏崎ヘ向フテ照會
ヲ為シタリ
十八日ハ終日應急手餌ノ為メニ忙殺セラレ、十二日ハ
ニ至リテ、始メテ時山ト共ニ河ヲ渡リ、彼レ是レ地形
ヲ巡視シタルニ、官軍ハ已ニ横渡稗生以南ノ山ヲ占
斷シテ塁ヲ築キ、木津、天王辺ニモ亦略兵ヲ配置スル

明日ノ攻撃ハ難ルカ難ケ隊長驚ルベカラズ長之ニ代ルノ決心ナクテハ其目的達シタカルベント告ゲタルヲ聴出ハ驚帰ミリ之ヲ聞キタルヲ以テ緊ヲ加ヘタル

コトヲ得タリト雖ドモ、敵ハ皆ナ高処ニアリ、我レハ
皆ナ低処ニ在ルヲ以テ、若シ高サ数十丈ノ障壁ヲ築
キテ其ノ陰ニ伏スレバ鬼モ角モ、否レバ到底久シク
防守ヲ為スコトヲ得ベカラズ、神速ニ最モ高峻ナル
朝日山ノ賊塁ヲ砲撃シ、之ヲ奪フニ非ザレバ如何ト
モスベカラザルヲ以テ、余ハ明曉ヲ期シテ進撃ヲ行
フノ方略ヲ決シ、部署ヲ定メテ時山ヲシテ進撃部隊
ノ指揮官タラシメ、余ハ明曉援兵ヲ伴フテ来リ會ス
ベキコトヲ約シ、別レテ小千谷ニ帰リタリ、豈ニ料ラ
ンヤ此別即チ時山トノ永訣トナラントハ、別ニ臨ン
デ時山ガ、明日ノ戰ヒハ赤阪ノ戰ヒ(懐古記事参照)ヨ

リモ困難ナルベシト語リタル、其ノ言葉ハ、今尚余ノ耳底ニ留マリテ、悲酸ノ響キヲ為シ居ルナリ

余ハ黄昏ヲ以テ小千谷ノ本陣ニ帰着シ、直チニ三仏生ナル滋野謙太郎ノ隊ニ、今夜中ニ小千谷ニ到着スベキ旨ヲ命令シ、草鞋ノ尽ニテ、独リ徳利酒ヲ傾ケ居タルニ、適マ山根辰三ノ数葦ノ燕子花ヲ手ニシテ来訪スルニ會ヘリ、山根ハ奇兵隊六番小隊ヲ率ヰテ、今朝薩兵ト共ニ柏崎ヲ出発シ、此時正ニ小千谷ニ到着シタルナリ、彼レハ其ノ燕子花ヲ余ニ贈リテ曰ク、吾兄平日和歌ヲ嗜ミ花卉ヲ愛ス、此花ハ即チ、今日途中ニ於テ剪リ得タルモノ、庶幾クハ以テ陣中鬱懐ヲ慰ム

ルニ足ラン乎ト、余ハ深ク其ノ好意ヲ感謝シ、盃ヲ挙ゲテ之ニ属シテ曰ク、明日ノ戦ヒハ、味方ノ困難殆ンド想像ニ堪ヘザルモノアリ、足下願クハ生還ヲ期スルカレト、山根曰ク、吾兄平日常ニ将士ヲ戒メテ軽々シク危険ヲ踏ムコトナカラシム、然リ而シテ今タノ言ハ則チ斯クノ如シ、吾兄ガ明日ノコトニ苦慮スルノ深キヲ知ルニ足ルナリ、我レ不敏ト雖ドモ、決シテ吾兄ノ託ヲ空フスル者ニ非ズ、幸ニ心ヲ労スルコトカレト、彼レハ暫時兵員ヲ休憩セシメタル後其夜ノ中ニ河ヲ渡リテ横渡ニ赴キタリ

余ハ滋野ノ隊ト共ニ未明ニ戦場ニ赴クノ考ヘニテ、

其ノ来ルヲ待チ居タルニ、同隊ハ命令ノ時刻ニ後レ、夜明ケニナリテ到着シタリ、之ヲ糺セバ、昨夕余ガ発シタル命令ノ、誤リ傳ヘラレシ為メナリト云フ、急キテ進発シ、河ヲ渡リテ時山ノ陣営ニ至レバ、彼レハ已ニ諸兵ヲ引率シテ出陣シタル後ニテ、余ニ宛タル一封ノ書面ヲ留メアリタリ、其主意ハ、時機ヲ失スルノ恐レアルヲ以テ、余ノ到ルヲ待タズシテ進発スト云フニ在リタリ、此書ニシテ若シ今日ニ存在セバ真ニ貴重ノ絶念タルベキニ、兵馬紛乱ノ際空シク散供ニ帰シタルハ、今更ラ遺憾ノ至リニ堪ヘズ

余ハ滋野ノ隊ヲ引率シ、直チニ朝日山ヲ指シテ登ラ

ントスルノ途上、意外ニ手近キ所ニテ、進メヽヽノ声ヲ耳ニシ、頗ル不審ニ堪ヘズ、驅ケ足ニテ進ミタルニ、忽チ山根ガ銃創ヲ蒙ムリ、五人ノ兵卒ニ擁護セラレテ帰リ来ルニ逢ヘリ、曰ク、時山已ニ銃丸ニ斃レ、全軍大敗トナリテ山ヲ下レリ、吾兄ハ請フ一先ヅ引返シテ更ニ方略ヲ決定セヨ、然ラズンバ全軍ヲ引纏ムルコト容易ナラザルベシト、前方ノ危急ヲ陳ルコト甚タ悲酸ナリ、余ハ答ヘテ曰ク、設令ト進ンデモ全軍ヲ引纏ムルノ策ヲ講ズベシ、足下ハ宜シク入院シテ安心シテ療養スベキナリ、只足下ニ望ム所ハ、護衛ノ兵卒三人ヲ割イテ我ガ戰闘員ニ加ヘンコト是レナリ、

二人ノ兵卒アラバ、足下ヲ安全ニ小千谷ニ送還スルコトヲ得ベシト、山根ハ苦笑シテ曰ク、此五人ハ皆ナ負傷セルモノナリ、只其ノ傷ノ已レニ比シテ稍軽キノミト、余ハ是ニ於テ益ス前方ノ危急ナルヲ知リ、急ギ進ムコト未ダ幾所ナラズシテ、又敗兵ノ時山ノ首級ヲ齎ラシ帰ルニ逢ヘリ、蓋シ敵ノ追撃急ニシテ、其ノ屍骸ヲ收ムルニ遑ナカリシナリ、余ハ覚ヘス泫然トシテ涙ヲ濺キタリ、今此ノ事ヲ叙スルニ当リテモ、三十六年前ノ光景、宛トシテ眼前ニアリ、老涙ノ簌々トシテ衣襟ニ滴ルヲ禁スル能ハザルナリ

後チ数年、長岡藩士ニシテ、当時旭山ノ陣中ニ在リシ

ト云フ三島億次郎ニ出逢ヒ、互ニ昔語リヲ為シタルコトアリシガ、同人ノ話ニヨレバ、此日旭山ノ戦ヒハ頗ル激烈ニシテ、賊兵ハ已ニ官軍ノ為メニ二個ノ砲塁ヲ奪ハレ、殆ンド復タ其ノ攻撃ヲ支フルニ堪ヘズ、従ツテ已ニ長岡方面ニ退却シタル者モ少ナカラザリシニ、適マ官軍ノ前頭ニ在リテ指揮ヲ為シ居タル者ガ、銃丸ニ中リテ斃ル、ト同時ニ、官軍ハ俄カニ浮キ足ニナリ、賊兵ハ為メニ意外ノ大捷ヲ得タリ、而シテ此ノ指揮者ノ時山ナルコトハ、其ノ分捕ノ日記帳ニヨリテ知ラレタリト云ヘリ、近日更ニ、長岡藩戰爭之記ヲ案スルニ、五月十三日ノ条ニ曰リ

第六字、官軍曉霧ニ乗シ、谿谷ヲ潛行シ、欻然旭山ノ
胸壁ヲ侵襲ス、我カ銃士隊長安田多膳之一小隊殆
ンド危シ、而シテ苦戰防禦遂ニ之ヲ奪フ
寔ニ三高ノ言ノ如キナリ、若シ時山ヲシテ斃レザラ
シメバ、旭山ハ其日ノ中ニ官軍ノ手ニ帰シタルヲ疑
ハズ、惜ムベキ哉

後千明治十四年、公務ヲ以テ北陸地方ヲ巡回シ、小千
谷ヲ過ギリテ時山ノ墓ヲ掃ヒ、尤ノ一詩ヲ賦シタリ
江声奔色総相知、路入越州思旧時、泉下英雄竟無処、
蕭々故塁雨如絲

当時又小千谷人某々等ノ、時山ノ為ノニ建碑ノ企ヲ

ルニ會シ、其求メニ應シテ尤ノ碑文ヲ撰シタリ、茲ニ
併セ掲ケテ地下ノ故人ヲ忘レザルノ意ヲ明カニス

余友時山君戰死於北越之後十三年、余巡按北陸、途
過小千谷、展其墓、感愴之情、有不能已者、戊辰之役、君
與余輩、率奇兵深入越、五月十二日夜、共乱信濃川視
地形、將以詰旦砲擊妙見賊壘奪旭山要地、君留宿横
渡、処分先鋒、余回調發後軍、昧爽君留書于余、以見兵
進戰、進陷旭山二壘、第一壘未拔、君捉象而進、中丸而
斃、余途見其死、不覺泣下、我軍遂退守線、次第一壘、賊
所恃為要害、如得拔之、取長岡如反掌、是君之所以鋭
進殞身而不顧、寔可慨也、虽然、無幾長岡平定、則君與

有力秀、君名養直、通称直八、号梅南、長州萩人、與余同庚、為莫逆交、為人潤達敏捷、有氣敢往、幼学文及武技、已嶄然見頭角、長受業松陰吉田先生、後入江戸、游藤森、安井諸老之門、常慨王室之不振、憤幕府之専横、奮不自禁、元治元年、自京帰藩、従事於内憂外患、志氣益壯、人称其何大用、遂中道而逝、余為天下惜之、享年三十一、配某氏、無子、頃小千谷人某々相謀建碑、謂余旅次請銘、乃作之曰、嗚呼養直、天下之士、捐軀為國、奉公忘己、嗚呼養直、死而不死、

余ハ一敗シタル軍隊ヲシテ、悉ク旧線ニ復シテ守備ヲ厳重ニセシメ、最モ防禦ニ困難ナル地点ニハ、奇

兵隊ヲ配置シテ之ニ備ヘ、本営ヲ横渡ニ移シテ、全軍ヲシテ背水ノ陣ヲ布カシメ、以テ防戦ニ勗メタリ、捷テバ則チ得意自カラ驕リ、敗ルレバ則チ沮喪徒ラニ怖ル、ハ、何レノ軍隊ニ在リテモ殆ンド免カレザル所、況ンヤ訓練ニ乏シキ当時ノ兵ニ於テヲヤ、独リ我カ奇兵隊ノ、幸ニ多少ノ素養アリシヲ以テ、此ノ敗軍ノ為メニ意氣沮喪スルニ至ラザリシト雖モ、其他ノ兵ハ多ク恐怖心ヲ生ジ、薩州兵ノ隊長ニシテ、尚且ツ一時此ノ方面ヲ退却スルノ得策ナルヲ云フモノアルニ至レリ、余ハ断ジテ之ヲ排斥シタルガ、今日ノ男爵西徳次郎氏カ、獨リ余ノ意見ニ賛成シ、今ニ及ン

デ退却ヲ云フベカラズト論シタルハ、今尚余ノ記憶スル所ニシテ、当時ノ薩人中ニ於テ頗ル出色ノ感アリシナリ、

右ノ如キ状態ニテ、薩長両兵ノ間鬼角ニ円滑ナラザルノ傾向アリ、余ト黒田トガ、小千谷ト柏崎トニ分レ居ルニテハ、種々ノ不都合アリト考ヘラレタルヲ以テ、余ハ黒田ニ書ヲ送リテ、小千谷ニ来ランコトヲ求メタリ、而シテ黒田ハ廿四日ニ小千谷ニ来リタルモ、病氣ニテ其塔薩ノ小千谷ニタル本陣ニ引籠リ居タリ

余ハ多ク横渡ノ陣地ニ在リ、塁壁ヲ増築シ、疲兵ヲ入レ替ヘ、日夜防禦ニ苦心シタルガ、十三日ヨリ長岡落

城ノ当日即チ十八日ニ至ルマデ、丁度一週間ノ間ハ、両軍ヨリ盛チ合フ大砲小銃ノ声、昼夜ヲ通シテ間断ナク、而シテ其間時々戦勢極メテ激烈トナリ、今ニモ突貫ノ来ルベキ状勢アリ、傳騎ヲ東西ニ飛ハシテ戰況ヲ視セシムルコト、一昼夜ノ中ニ幾回ナリシヲ知ラズ、官軍ハ一砲門ニツキ、一日ニ百五十発ヲ放射シタルコトスラモアリシナリ、加フルニ天氣ハ雨ナラザレバ則チ曇リニテ、夜間ノ如キハ一点ノ星光ヲモ見ルコト能ハズ、其ノ困難、其ノ惨悽、殆ンド言フ可カラザルモノアリ、只敵ガ官軍ノ旭山ヲ攻撃シタル勢ノ猛烈ナリシニ顧ミテ、只管ラ守備ノ方略ヲ定メ、敢

然トシテ攻メイシ来ラザリシハ、実ニ官軍ノ幸福トシタル所ナリ、誤ツテ世間ニ傳播シタル九ノ拙什ハ、実ニ当時ノ口吟ニ係レリ

あたゝ守る砦のかゞり影ふけて夏も身にしむ

越の山風

敵ニ形勝ニ拠ラレ、之ヲ破ルコトハ勿論、自カラ守ルコトモ亦太ダ困難ナル上ニ、信濃川ハ益ス漲溢シテ、動モスレバ為メニ小千谷トノ交通ヲ絶タレントスルノ虞アリ、是ニ於テ予、余ハ当時関原ニ在陣シタル三好軍太郎指揮下ノ隊ヲシテ、平地ヨリ進ンデ河ヲ渡リ直チニ長岡城ヲ攻撃セシメントト欲シ、一日自カ

ラ関原ニ至リテ、親シク三好ニ余ノ意圖ヲ示シタリ」

海道ノ本隊ハ、是ヨリ先キ五月十二日、即チ榎峠敗軍ノ翌々日ヲ以テ、九ノ通リニ配置セラレ居タリ

関原　薩半小隊　長一小隊　高田一小隊　加州

二小隊　同砲三門

宮本　薩半小隊　長一小隊

妙法寺　長一小隊　富山二小隊　加州一小隊

坂田村　高田一小隊　加州一小隊

十日市　高田二小隊　薩三砲門

遊軍　薩半小隊　加州二小隊

北条　加州一小隊

是レハ出雲崎方面ノ賊ヲ掃蕩スルト同時ニ、長岡ニ迫ラントノ計画ニ出デタルモノニテ、是等ノ諸兵ハ三好ノ指揮ノ下ニ、十八、四、日ニ石地方向ニ前進シ、途中藥師峠及ビ脇ノ町邊ニテ、賊軍ト交戰シテ之ヲ破リ、石地ヲ経テ、十、五、日ニ遂ニ出雲崎ニ進入シタリ

三好カ出雲崎ノ賊巣ヲ拔キテ、関原ニ引揚ゲタルハ、奇兵隊ノ日記ニヨレバ、五〇月〇ノ十、五、日ナルガ故ニ、余ノ関原ニ至リシ日ハ、今確カニ之ヲ記憶セザレドモ、恐ラク十五六日頃ナリシナルベシ

余ハ三好ニ逢フテ海道軍諸兵ノ戰勝ヲ賀シ、曩日榎峠ノ難戰ヨリ、時山ノ討死ニ語リ及ビテ、共ニ涙ヲ濺キタル後チ、改メテ余ノ意圖ヲ語リテ曰ク、現ニ今日ニ至ルマデ砲戰已ム時ナク、而カモ我ガ地形ノ不利ナル、防禦ニスラモ困難スルノ状況ニテ、此ノ形勢ヲ一変スルニハ、神速ニ長岡城ヲ攻撃シ陥落スルノ一策アルノミ、然ルニ此策ヲ決行スルニハ、一大困難アリ、即チ大河ノ前ニ横ハリ、而カモ其水嵩ノ太ダ増進シ居ルコトナリ、渡河シテ兵ヲ進ムルハ、難中ノ最難事ナリト雖ドモ、之ヲ圍碁ニ譬ヘルニ全局ノ勝敗ハ、此却ニ勝ツト否トニヨリテ決セラルヽナリ、萱峠其他ノ山道ヨリ突出シテ長岡ヲ攻撃スルコトハ、必ズシモ其策ナキニ非ズト雖ドモ、運輸其他ノ困難非常

ナルヲ以テ、成ルベクハ渡河進兵ノ策ニ出ヲタシ、而シテ此目的ヲ達スルニハ、足下ガ率ユル所ノ兵ヲ以テスルノ外、復タ良策ナント思惟ス、足下以テ如何トナス、三好ハ素ヨリ余ト同意見ナリシノミナラズ、出雲崎ノ賊巣ヲ掃攘シテ、餘勇弥々タリシ折ノコトトテ、快然トシテ之ヲ諾シタリ

三好ハ翌日ノ午餉後、先ヅ川手前ヨリ砲撃ヲ開始シタル後、一旦多少ノ兵ヲ、川ノ中島マデ渡スコトヲ得タリト雖モ、信濃川ノ増水ハ、前日来益々甚シキ上ニ、敵ノ砲勢頗ル猛烈ニシテ、終ニ其ノ目的ヲ達スルコト能ハズ、翌日ヲ期シテ之ヲ中止シタリ

然ルニ関原ニ於ケル諸藩ノ兵ハ、敵、前ニ於テ大河ヲ渡ラントスル三好ノ行為ヲ以テ無謀トナシ、特ニ薩ヘノ不平甚シトノコト、余ノ耳ニ入リタルヲ以テ、余ハ薩長和悦ノ為メニモ、将タ三好一身ノ為ノニモ、憂慮ニ堪ヘズ、十八日ノ夜、嚮導井田年之助ナル者ヲ使トシテ三好ニ書ヲ送リ、事情ノ面白カラサルモノアルニ於テハ、強テ渡河ヲ試ムルニ及ハズ、余ハ別ニ長岡ヲ陥落スルノ手段ヲ講ズベシト言ヒ遣リタルニ、十九日ノ曉天ニ、井田ハ三好ノ書柬ヲ齎ラシテ帰リ来レリ、其ノ書中ニ曰ク、諸隊紛紜ノ議論、甚ダ以テ言フ甲斐ナクトヒニ就テハ、是非押渡リ、其御地應援ノ心

得ニテ、成敗ハ不可期ハ得共、天朝二州ノ為メ不失色、
様致度ハ云ヒ、而シテ井田ノ言フ所ニヨレバ、彼レガ
関原ニ達タル時ハ、恰カモ三好ガ将サニ陣門ヲ出
ダントスルノ時ニシテ、三好ハ未ダ余ノ書ヲ披見セ
ザル中ニ、豫テ認メ置キタル此書ヲ彼レニ渡シ、是非
トモ柳渡ルノ決心ナレバ、其旨ヲ帰リ報セヨト云ヒ
タル由、加フルニ薩州ノ隊長某ハ要議ヲ齎ラシテ前
夜黒田ノ処ニ来リタリトノコトナリシヲ以テ余ハ
至急ニ事情ノ疏通ヲ計リ置クノ必要アルヲ感ジ、是
柳清一郎ヲ伴フテ直チニ小千谷ニ赴キ、黒田ニ会合
シテ熟談スル所アリシガ、関原ノ官軍ハ其日未明ニ

信濃川ヲ渡リ、激戦シテ午刻前ニ已ニ長岡ヲ陥落シ
タリ、此役ニ於ケル三好ノ軍功ハ、実ニ偉大ナルモノ
ニテ、若シ之ヲシテ元亀天正ノ際ニ在ラシメバ、即日
ニ五万石乃至十万石ノ封土ヲ賞賜セラレシナラン
ト思ハレタリ、余ハ実ニ彼レニ感謝セザル能ハザリ
シナリ、同日ノ戦況ニツキテハ、勝チタル官軍ノ報告
ヨリモ、敗レタル賊軍ノ報告、寧ロ詳細ナルニ似タリ、
便チ茲ニ「長岡藩戦争之記」ヲ抄出スベシ

十九日、暁四字頃タリ、本大島、槙千ノ官軍、草生津、藏
王ヘ向テ砲射ス、其猛烈前日ニ倍シ、弾丸雨下、我亦
発憤防守ス、第六字、官軍煙霧ニ乗ジ、潜ニ渡川シ来

ル、我寺島、中島ノ守兵、不意ノ侵撃ニカヽリ、隊伍散乱、退テ宇内川東堤ニ拠リ、必死奮戰ス、官軍勢破竹ノ如ク、我兵不能支、遂ニ敗走ス、槙下村ノ官軍、亦川所ヲ渡テ藏王ニ入ル、味方抗スル能ハズ、長岡近傍各所守衛ノ兵、或ハ城中ニ走リ、或ハ市中ニ戰フ、此時官軍已ニ中島村民屋并ニ兵学場ニ放火ス、餘焔市中ニ及ブ、初ノ妙見、旭山等ノ戰、官軍攻撃頗ル劇シク、我兵亦諸隊交番、防禦力ヲ極ム、加之、前島、草生津、藏王、下条等各所ニ分配スル故ヲ以テ、城中ハ僅ニ小勢ノミ、カ竟ニ支ベカラズ、旧主人擧族、雄ヲ杉尾ニ至ル、前島、避ク、茲ニ於テ、殘兵城樓ヲ火シ杉尾ニ

草生津、藏王、下条ノ諸隊、亦走ツテ杉尾ニ赴キ、杉堀、小向、大河津ノ諸村ニ屯集ス

始メ長岡城ニ火ノ手ノ揚カリタル時榎峠ノ哨兵線ニ在リタル官軍ノ兵士ハ、大声ニテ前面ノ賊兵ヲ罵リ、後ロヲ見ヨ、尾ニ火ガ付キタリト呼ブモアレバ、腹ヲ切レト呼ブモアリシ由、真ヤ長岡已ニ落城ニ及ビタレバ、榎峠ノ賊軍ハ勢ヒ守ルコトヲ得ズ、其夜皆ナ逃レテ杉尾方面ニ走レリ、因ツテ余ハ廿〇日ノ曉天ニ諸所ヲ巡視シタル上、奇兵隊ヲ番二小隊ヲ村松村ニ、薩一小隊、奇兵一番小隊ヲ妙見ニ出シ、松代兵ヲシテ偵察旁萱峠ニ追マシタリ

越ノ山風

自五月廿一日
至六月廿二日

二

五月

七〇一〇日ニハ、薩州、田能口、高遠各一小隊ヲシテ妙見ヲ防守セシメ、奇兵隊一小隊、尾州ニ小隊ヲシテ村松村ヲ防守セシメ、高田、須阪、六川、松代各一小隊ヲシテ木津ヲ防守セシメ、又上田一小隊ヲ寺所、上条ノ間ニ出シ、高島一小隊ヲ小出島ニ出シ、其他ノ諸兵ハ、総テ小千谷ニ引揚ゲテ休息セシメタリ、但シ三仏生ニ在リタル兵員ハ、也ヲ長岡ニ繰リ入レ、村松村ヘ出シタル兵員ハ、更ラニ也ヲ虫亀ニ移シタリ、此日始メテナ三日ニ戰死シタル時山以下、死骸ヲ取リ片付、也ヲ小千谷ニ送葬スルコトヲ導タリ

前日来敵情探索ノ結果ニヨレバ、長岡ノ城主牧野駿河守ハ、其ノ家族ト共ニ、八十里越ヲ経テ會津ニ走リ、長岡勢ハ會津勢ト共ニ、廿一日ニ加茂ヘ赴キ、桑名勢モ亦、同所ニ赴キタリトノ事ニテ、小千谷ノ方面ハ、先ヅ附近ニ敵ナキノ有様トナリタルヲ以テ、余ハ廿三日ニ長岡ニ往復シテ中軍ヲ関原ニ移スノ議ヲ定メタリ、此日奇兵隊三番小隊ハ長岡ヨリ進ンデ見附ニ至レリ

曩キニ始メテ柏崎ニ入リタル時ヨリ、已ニ其ノ来着ノ晩キヲ憾ミ、廣沢ヘノ書中ニ於テモ、反覆其ノ差向ケ方ヲ促カシ置キタル應援ノ軍艦ハ廿一日ニ至リ

テ始メテ福田俠平、福原和勝、吕川省吾并ニ長府ノ報國隊一小隊ヲ載セテ今町ニ到着シ、廿二日ノ朝ニ柏崎ニ到着シタリトノ報アリ、因ツテ余ハ直チニ柏崎ニ赴キ、協議ヲ遂ケ度思ヒタレドモ、廿三日ニハ、前記ノ通リ中軍ヲ関原ヘ移スコトニツキテ用務アリシノミナラズ、軍艦ノ方モ亦、同日ヨリ一時彼渡ニ向ヒ、賊船ヲ砲撃シテ、帰リ来ルノ都合ナリト聞キタルヲ以テ、諸兵ト中軍トガ関原ニ轉陣スルノ当日即チ廿五日マデ之ヲ猶豫シタリ

然ルニ柏崎ニ至リテ聞ケバ、我ガ軍艦丁卯九ハ、其日ノ景ニ一旦同所ニ帰着シタレドモ、石炭其外差支

ノ件少ナカラザルヲ以テ、直チニ能登ノ七尾ヘ向ケ出帆スルトノコトニテ、柏崎ニテハ余ガ来ルベキ筈ナレバ、明朝マデ出帆ヲ見合セ呉レヨト懇談シタルモ、先キニ七尾ニ向ヒタル薩州ノ軍艦乾行丸ト約束モアレバ、兎ニ角一應七尾ニ赴キ、用向キノ濟ミ次第、速カニ引返シ来ルベシトテ、幾モナク出帆シタル由余ノ到着シタル時、若シ尚碇泊中ナレバ、是非ニ山田ヲ呼ビ迎フベシトテ、會議所ヨリ人ヲ海岸ニ出シ見タルモ、勿論已ニ出帆シタル跡ナリキ、丁卯九ニハ、当時山田市之允ガ乗リ込ミテ、其ノ進退ヲ指揮シ居タルナリ

乾行丸ト丁卯丸トハ、一隻ノ賊艦ガ佐渡ニ在ルコトヲ偵察シ、之ヲ砲撃スル為メ、同島ヘ赴ク途中、出雲崎ニ立寄リテ、折節二隻ノ賊艦ガ寺泊ニ碇泊シ居レルコトヲ知リ、直チニ攻撃ヲ行ヒタル様、柏崎ニテ記録セラレタル奇兵隊ノ日記ニ記シアリ、当時余ノ聞キタル所モ、無論其通リナリシト覚ユレドモ、水政官日誌ニ記載シアル丁卯九五月廿一日ノ届書ニハ

薩州乾行丸同行、今日当所ヘ着仕ル、然ル処、寺泊邊、會桑之賊兵屯集之旨承ル、ニ付、不失機會、是ヨリ直様柏崎ヘ航行、砲撃之処置致度ニ付、此段御届申上ル以上

トアリ、而シテ乾行丸ノ届書モ、全ク之ト同文ニシテ、只「薩州乾行丸同行」ノ七字ガ「長州軍艦丁卯丸同行」ノ九字トナリ居レルノミ、之ニヨリテ考フルニ、右両艦ハ始メヨリ佐渡ヘ赴クノ意ナク、又赴キタルコトモナキガ如シ、但シ寺泊攻撃ニツキテ、廿五日ノ両艦ノ届書ハ、左ノ如クニシテ、余等ノ当時聞キ居タル所ト大差ナキナリ

昨二十四日、朝ガタ半時、両艦一同出雲崎着岸仕リ、寺泊湊賊旗章赤白千本柱外車船碇泊罷在リ候ヲ見届、直様進撃、頻ニ発砲ニ及ビ候ヘ共、然処、賊船蒸流タ立テ地方ヘ乗付、答砲ニ発計、相放シ、遂ニ暗礁ニ乗

揚ケト相見ヘ候得共、何分遠浅ニテ暗礁甚多ク有之、賊軍ノ様子委敷相分不申候ニ付、乾行丸ハ本処ヲ守リ居、丁卯丸ハ即刻出雲崎ヘ乗付、高田其外ノ陸軍ヘ、進戦ノ都合申談置、夜半出雲崎出港、寺泊罷越ル処、暁天賊船出火、過半破損仕リ候ニ付、陸軍ハ、山田村ヨリ出雲崎ニ引取、海軍ノ儀ハ、野積其外廻岸築窟ニ砲撃致シ候得共、何モ相見ヘ不申、且石炭其外差閊ノ件モ不少ニ付、一先両艦共、能州七尾湊迄引取申ス、此段御届申上ル以上

翌廿六日ノ朝ニ至リ、一隻ノ蒸流船入港シタリトノタトニツキ、其ノ旗章等ヲ探索セシメ居ル中、其ノ船

将日カラ上陸シテ、本営ニ来リ語ル所ニヨレバ、柳河藩ノ蒸汽船ニテ、当地ニ石炭ヲ積ミ来リ、程ナク出帆スルノ都合ナリト云ヘリ、因ツテ余ハ山田其他ヘ宛タル書面ヲ認メ、之ヲ七尾破洞ノ軍艦ニ達セシコトヲ託シタリ

此日関東ヨリ報知アリ曰ク、一昨日昼八ツ時頃、見附ニ於テ、味方ノ本隊、賊ト衝突シ、暫時交戰ノ後、賊ヲ追ヒ掃ヒタルガ、昨日ハ、見附ノ官軍、赤阪ノ賊ヲ撃チテ捷利ヲ得タリト

サテ七日ノ夜、伊藤傳之助、東次郎助ノ両人、京師ヨリ帰リ来リ、其ノ見聞スル所ヲ報ズ、因ツテ略京師ニ於

ケル廟議ノ在ル所、并ニ奥羽ニ於ケル賊軍ノ状勢ヲ知ルコトヲ得タリ、尤ニ揭クル野村及ビ品川ノ書翰ハ、此時ニ落手シタルモノナリ

邊塞之状、不堪想像、殊ニ近来ハ、慥ナル報知モ不承、定而御焦慮之御事ト、毎度御噂申上ル、頑弟事、過ル十六日登京、用向ヲ一通リ相済、追刻出足帰國仕ル、子細ハ、過日赤川敬三郎ヨリ御傳聞被為在、猶岡千吉ヘ託シ、細書呈上仕事ニ御座ル、悠々翁トモ、舟中懸違ヒ、残念千万ニ奉存ル、北海通ノ御出塞トノ事ニ付、御國ノ論及ヒ第上京之次第等、悠翁ヨリ御直聞可被遣、乍□第ノ登京シテ、口先キ論ヲ申スハ、自

ラ馬鹿ト存ル得共、一通リ手次キヲ立置ル迚ニテ、
議論ハ出来ラセ、實行ハ迄モ出来又事ト存知罷在
ル、心事御察置可被遣ル、扨又品川事、老生ヘモ御約
誌申上置ル様子ニテ、御地出陣之心得ニ有之ル所、
実ハ追々御談モ申上ル通リ、久々在國ニモ無之、暫
ク八是非ニ引取リ居ル様、精々申論シ、幸ト先日鳥
渡帰國ニ付、直様相留メ度、大困苦ヨリモ入ル相咄
シル所、御地出陣之約諾モ有之ル事ニ付、是非ニ一
應ハ上京候ヲ、其段相断リ申遣シ、帰國可仕ト之事
ニ付、仕其意、一同罷登申ル、就テハ不日当地引拂帰
國致呉ル様、重々ニ申堅メルニ付、委細ハ品川ヨリ

モ可申越ル間、其段宜布御聞分ケ被遣ル様、弟ヨリ
モ奉願上ル、先ハ右申上ル迄、如此ニ御座ル、避(カ)近卑
濕之地、別而御自玉、肝要奉存ル、悠翁ヘハ、定テ帰國
仕ルトモ、又ヽ懸違可申、宜布御致意奉願ル、諸君ヘ
宜布奉願上ル、草々頓首

閏月廿日

猶前条子細、何卒老兄ヨリ薩ノ黒田ヘ、不悪御申
濟奉願度、重々品川ヨリ申事ニ御座ル
尚々、別包之一袋、御陣中御見舞差出ル、失敬之品
物、奉恐入ル得共、迂弟ノヨ、口振ハ、都テ此品ニ
コモリ居ル段、御察之上御笑留奉願ル ○帰國ル

ヘハ、又々直ニ阿武郡ヘ引込ム心得ニ御座ハ、此辺ハ御安心可被下ハ、以上

無隣庵老盟墨

玉机下

（猶前条子細云々ノ一節ハ本文中ニ細字ニテ傍書シアリタルモノナレドモ、謄寫ノ都合ニテ茲ニハ尚々書キノ部ニ入レタリ）

引續キ東西御奔走、恐苦慮之程、奉恐察ハ、追ミ御進軍、当節ハ別シテ、何カト御苦心可被在ト、北越之光景想像ニ堪ヘ不申ハ、小子義、過日野靖同道登京ハ、実ハ直ニ御地ヘ馳参ル覚悟罷在ハ処、帰國之上、深

深堀ハ御堀ノ誤リナリ 即大田市之進ノ変名ナリ

堀。其他ヨリ、是非留レトノ事ニテ、漸クニシテ、当地之不始末カタツケ旁、参ハ位ノ事ニテ、何モ御推察奉願上ハ、黒田其外尊隊諸君ヘモ、違約之罪、萬々奉恐入ハ得共、弥二口上一々申上ルニモ不及、何分ニモ違約之罪、黒田其他ヘ、失敬ナガラ御謝シ被下ハ様、泣血奉願上ハ、野靖ハ六七日前発途帰國仕ハ、小子モ来月十日マデニハ、是非発途帰國之覚悟罷在ハ、当地之事情ハ、伊藤ノ口頭ニ附シ申ハ、世良ノ書状御一覧可被下ハ、何モ不遠メテ度御凱陣之節ト抛筆

閏月廿九日

トキヨシ拝

山縣汪輔様

尊下

此度ハ、入江音二郎モ、墓参旁ツレ参リ申ハ、堀ヘ御噂奉願ハ、福田老臺トハ、船中ニテ行違、遺憾ニ堪ヘ不申、何卒ヨロシク御鳳声、別シテ奉願上ハ、尚又黒田氏ヘ遠約之段幾両ニモ宜シク御謝シ被成下ハ様、奉願ハ、扇子十本、陣中御見舞トシテ差送リハ間、御落掌可被下ハ

尚々、失敬ナガラ時山、湯浅、杉山、會田（三好中将ノ変名ナリ）其他ノ諸先生ヘ、ヨロシク御一声奉願ハ

（此度ハ入江云々ノ一節ハ、本文中ニ細字ニテ傍書シアリタルモノナレドモ、謄寫ノ都合ニテ、茲ニハ尚々書キノ部ニ入レタリ）

享東登京之節、御託シ之尊書相トヾキ、拝讀仕ハ、北越之御一吟、別シテ雄有奉拝誦ハ、最初両処之御一発、御同慶此事奉存ハ、尓後追々御進撃被為在ハヨシ、巨細廣沢ヨリ承知仕、御苦慮之段、奉恐察ハ、白川城モ東山道先鋒ノ手ヨリ以、終ニ攻落シ、ヨシ、奥羽ノヘボクレ諸侯、実ニアキレ果申ハ、風ニ承知ハ得バ世良脩藏モ、先月十九日トカ、打死ノヨシ、世良ノ一身ニ取テハ、此上モナキ死所ヲ得ハ事ト、奉存ハ

得共、ヤジガ行クベキ処、少タノゴラツキヨリ、差止レハ哉ト思ヘバ、実ニ残魂ニ堪ヘズ、西ヘ向ヒテ帰ル氣ニモナラズ、出先ヘ行事モ出来ズ、実ニ〻〻困窮仕ハ、深堀（御堀耕助ノ事也）モ君上之御供ニテ、上京ノヨシニ付、着京之上ハ、深堀ニ論シ、是非何処ヘナリトモ、ホフクリ出シテモラフ積リニ御座ハ、京師ノ近況ハ、廣沢ヨリ申参ルベシ、尚尊東、イ藤ノ西氏ヨリ、御聞取可被成ハ、ヤジヨリ何モ申上ズハ、○黒田先生ヘ、何分ヨロシク御鳳声、伏シテ奉願上ハ、空シク滞京三十日、余タ過シ、汗顔之至リニ堪ヘズ、幸便ニ任セ、此段早々得貴意ハ、草々頓首

五月廿日　品川弥二郎拝

山縣狂輔様

尚々、時下御愛護、為邦家奉祈上ハ、西薗ノ軍艦帰リハヤ、我念此事奉存ハ、福田老堂御着ナラバヨロシク、時山英外諸彦ヘヨロシク、ヤ致声祭願上ハ

別封相認メイ藤ニ託シ置ハ処、水雄彼是ニテ、発遠遥延ニ相成、又〻書加ヘ申ハ

同時ニ廣沢ヨリモ来書アリタレトモ、今ハ手許ニ存在セザルヨ以テ其ノ何事ヲ云ヒ来リシヤハ、復タ之ヲ取調ブルコト能ハザルナリ、但シ其書中ニ「京師其

他流言浮説多ク、人心ヲ動揺セシメル得共、廟堂ニ於テハ、弥以確乎不動、厳粛無違等ヲ要トス、其辺更ニ無顧慮、オ介軍務尽力之段相頼ム」トノ文句アリシコト丈ハ、当時余ガ筆記セシメ置キタル奇兵隊ノ日記ニヨリテ明カナリ

余ハ七尾ヨリノ音信ヲ俟チテ、其ノ翌日モ尚柏崎ニ滞留シ居タルニ、昼八ツ時頃ニ至リテ、一昨日ノ柳川船帰リ来リ、山田ト薩ノ本田弥右衛門ト両人、之ニ便乗シテ到着シタリ、是ニ於テ、海陸合撃ノ手筈等ニツキテ協議ヲ為シ、山田ト本田トハ、其ノ軍艦已ニ彼渡ニ渡リ居ル由ニテ、其日ノ中ニ又柳川船ニ乗リテ、彼

渡ニ向ヒタレバ、余モ亦伊藤、厚東ノ両人ト共ニ、柏崎ヲ出発シ其ノ翌暁関泉ニ帰着シタリ

余ガ柏崎ニ出張中、諸方面ニ於テ行ハレタル交戦ニツキテハ、茲ニ奇兵隊ノ報告書ヲ抄出シテ、其ノ梗概ヲ示スベシ、此報告書ハ、戦局ノ終結セル時ニ於テ余ガ奇兵隊ノ書記役タリシ長三州ニ命ジテ取リ纒メシノ代辰ノ十一月中奇兵隊ノ名ヲ以テ長州藩ニ差出シ、翌年ノ正月ニ藩ヨリ之ヲ大政官ニ差出シタルスノナリ（戦争ノ中項ヨリ、余ガ自カラ督シテ奇兵隊ノ報告書ヲ作ラシメタルハ、戦争中各藩ヨリ恩ビ〻ニ差出シタル報告書ノ頗ル粗撰ニシテ、動モスレ

バ警張ニ失シ潤飾ニ過キ、殆ンド実際ト相合セザル処多キヲ慨シタルモノ、亦其ノ一原因ニシテ、当時ノ戰況ニツキテハ、余ハ飽マデ奇兵隊ノ報告ノ確実ナルコトヲ保証スルナリ、近来ニ至リ当時ノ状況ヲ紙上ニ若クハ論議シタル書物、相次デ世間ニ公ケニセラレタルガ、多クハ右各藩ノ報告ヲ参照シテ材料ヲ益ニ求メタル者ノ如シ、公文書ニヨリテ後世ヨリ当時ノ事ヲ推断スレバ、其ノ新タナル如クナルハ必ズシモ怪シムニ足ラズト雖モ、而カモ事実ノ直相ハ大ニセント相違スル者アルヲ奈何セン、只当時ノ敵情等ニツキテハ余等ノ知リ得タル所ヨリ詳カナラ

ザルモノアルベク、又誤レルモノモ今近来ノ著述ニヨリテ一々之ヲ詳細ニシ、若クハ訂正スルハ、獨リ其頃ニ堪ヘザルノミナラズ、又此書ヲ作ルノ目的ニモ非サルナリ、去レバ其ノ文中ニ我ガ何番隊トアルハ、総テ奇兵隊ヲ意味スルコト勿論ナリ、因ニ云フ、此越戰爭ニ関スル報告書中、薩長相談ノ上ニテ調製セラレ、且ツ薩長先鋒ノ名ヲ以テ差出サレタルモノハ、前記五月朔日付ノ届書ノミニテ、此外ニハ絶テ此ノ形式ニ依レルモノアラズ、其後ハ薩モ長モ、別タニ報告書ヲ差出シタルナリ、此後長ノ余ヲシテ苦心セシメタル薩長ノ不折合ガ、榎峠

ノ戰ヒニ於テ、已ニ其ノ端緒ヲ發シタルコト、是ヲ以テモ知ルベキナリ

廿六日　賊ト杉沢ニ鏖戰ス、我三番小隊死傷六人、徹夜川ヲ隔テ砲戰、平明賊走ル、加州兵大納ニ戰フ

廿七日　我四番小隊大納ヨリ赤阪ニ應援ス、赤阪ハ松代引請ノ砲台ナリ、長岡ノ諸兵今朝見附ニ進ミ、大面、小栗山ニ戰フ、其板一小隊金ガ崎ヲ守リ、地藏堂、大河津ノ賊ト對ス、賊方善寺村ニ潜入スルノ勢アリ、又金ガ崎ヲ衆侵ス、其板兵邀擊、飯山一小隊援戰、報國一小隊、半隊ヲ山手ニ進メ、半隊赤道ヲ援ク、賊地利ヲ得、間道ヲリ頻リニ我後ニ出ツ、我兵退

テ元其板ヲ守ル

廿八日　我一番小隊、一番三番砲、薩州半小隊、須阪一小隊、其板ノ兵ニ合シ、山手本道ヨリ進戰、賊拒戰、勢甚鋭、官軍一旦顛ル、進メドモ地形悪キヲ以テ遂ニ不利、死傷多シ、故ニ兩道トモ退テ其板ヲ守リ、原村、宮ノ鼻、宝塔ノ下等ニ戰フ、未明賊退ク、松代、高田、富山等應援ス、報國一小隊飯山、富山ヲ援ヒ、賊ヲ追テ陣ガ峰ニ進ム、因守ス、此日飯山、須阪ノ兵不支、故ニ我砲隊大ニ損害ヲ受ク、我ニ番、三番砲、尾州一小隊、中牌援戰フ、慕前其板城内自ラ出火ス

其板方面ニ於ケル状況右ノ如ク、頗ル關心スベキモ

ノアルヲ以テ、余ハ更ラニ至急ニ援兵ヲ派遣スルノ必要アルヲ認メ、五番田ト藤沢村トニ在リタル高田兵二小隊ヲシテ、取敢ヘズ典板ニ繰リ込マシメ、又自カラ長岡ニ至リテ、同所ニ在リタル長州兵二小隊ト、今般来着シタル薩兵一小隊ノ内、半小隊、及ビ薩州ノ二砲門ヲ典板ニ繰リ出スノ談ヲ決シ、且ツ杉山並一郎ヲシテ、是レ等ノ諸兵ト共ニ出張セシメタリ、然ルニ出雲崎ノ方面モ亦、島崎辺ニ賊軍アリ、従ツテ援兵ヲ要スルノ状アリタルヲ以テ、余ハ柏崎ヘ急報シ、同所ニ在ル加州兵ヲ率ヒテ、出雲崎ニ繰リ出シ、出雲崎及ビ石地ニ在ル所ノ諸兵ト共ニ、其方面ヲ堅守セシ

メタリ

余ハ是ニ於テ、明後二日ヲ期シ、出雲崎ノ兵ヲシテ、島崎及ビ小島谷ノ賊ヲ掃蕩セシメ、典板ノ兵ヲシテ、機ヲ見テ、進撃セシムルノ方略ヲ決シ、賊情及ビ地形等ヲ研究シ、併セテ諸兵ヲ指揮スル為メ、三十日ニ伊藤傳之助ヲ出雲崎ニ派遣シ、且ツ奇兵二番小隊及ビ松代一小隊ヲ、同処ニ繰出シ、尚伊藤ノ上ニ五チテ部署ヲ指揮スル為メ、福田侠平ニ出張セシメ、余ハ是レラノ事ヲ協議シ併セテ敵ノ情勢ヲ実見セン為メ、自カラ典板ニ往復シタリ

六月朔日ニハ、朝来出雲崎方面ニ当リテ、砲声ヲ聞ク

コト頻リナリシヲハヤ、弁候ヲ藥師峠ニ出シタルモ、其故ヲ知ルコト能ハザリシガ、後ニ農夫ノ来リ報スルヨリ、右ハ元浜板、ヨリ股野町ヘ通スルノ間道ヘ、賊兵ノ襲来シタリルナリトノコトニテ、次テ杉山ヨリ左ノ書面来レリ

今曉ヨリ、賊兵サカシ谷ノ方ヘ多々押寄ル、是ハ股野町ヘ出ル道ナリ、押ニハ原田謙藏一小隊出張、尚今朝滋野ノ隊ヲ繰出シ申ル、其外此方角ニ、尾州、高田、須阪ノ小隊モ出張致居申ル、猶拙念ニ付、唯今高遠一小隊差出申ルニ付、多分格別ハ有之間敷奉存ル、依尓昨日御話有之ル尾州兵、股野町ヘ御繰出可被遣ル、岩村ハ敵情モ見届罷帰ト申事ニ御座ル、尚後ノ模様モ御座ハバ、又々可得御意ル、先ハ荒方之処御報申上ル拝白

六月一日

むすはれし越路の雪も水無月の照る日のかけ
よけふやとくらん

関原本隊　　典板
山縣狂輔様　　杉山莊一郎

岩村ガ帰リ来リテノ話ニヨレバ、官軍ハ此ノ賊ヲ撃ツテ之ヲ退ケタル由ナリキ、同日赤阪ニ於ケルノ戦ヒニツキテハ、左ニ奇兵隊ノ報告書ヲ抄出スベシ

此日平明、賊松代ノ固守スル赤阪ノ砲台ニ迫リ、尤キノ山上ヨリ不射スルコト頗ル烈シ、我四番小隊赴援ト、半隊宛左右ニ分レ、賊ト鏖戰ス、斬賊四十七人、生擒二人、已牌賊三小隊許堀溝ヲ放火シ、赤阪ノ後ニ廻ラントス、我四番半隊、三番小隊、薩州半小隊邀戰フコト二時許、亦之ヲ破ル、賊長沢ニ走ル

二日ハ即チ、出雲崎ノ兵ト共板ノ兵トガ、相應ジテ小島谷及ビ島崎辺ノ賊ヲ攻撃スベキ日ナルニ、朝来絶テ砲声ヲ聞カザル且ツ尓来福田、伊藤ヨリモ何等ノ音信ナキヲ以テ、出雲崎ト共板トヘ夫々人ヲ派シテ、状況ヲ尋チシメタルニ、共板ヘ赴キタル者ノ帰リ報ス

ル所ニヨレバ、出雲崎ヨリ進ミタル兵ハ、愈ヨ小島谷、島崎マデ進撃シタリトノコトナリシ、此日見附ナル福泉和勝ヨリ書面ニテ、赤阪、堀溝ニ於ケル昨日ノ戰捷ヲ報シ、且ツ連日ノ交戰兵士皆ナ疲レ、到底前進ノ見込ナキヲ以テ、援兵ノ派遣ヲ望ムノ意ヲ告ゲ来レリ、因ツテ石峠ニ在リタル松代、尾州二小隊ニ、直チニ見附ヘ進ムベキ旨ヲ通ゼリ、然ルニ夜ニ入リ、今町ノ方ニ当リテ、火ノ手盛ンニ起リ、唯事ナラザル模様ナルヲ以テ、白井小次ヲ長岡ニ遣ハシテ状況ヲ探聞セシメ、更ニ宮本ニ在リタル富山兵ヲ呼ビ寄セ、南野一郎ヲシテ、之ヲ將ヒテ本大島村ニ進マシメ、白井ノ報

告如何ニヨリテ、直チニ河ヲ渡リテ赴キ援クルノ用意ヲ為サシメタリ、然レドモ右ノ火ノ手ガ、次ニ記スル如キ官軍ノ大敗ヲ意味スル能ハザリシ所ナリ想像スル能ハザリシ所ナリ

翌朝ニ至リ、長岡ヨリ、昨夜今町口ノ、賊ノ為メニ破ラレタルヲ報ジ、至急援兵ノ派遣ヲ求メ来レリ、然レドモ已ニ今町ヲ取リ返サレタリト云ヘバ、占領地全体ノ人心ニ影響スルコト容易ナラザルモノアルベキヲ以テ、大ニ警戒ヲ加ヘザル可カラザルノミナラズ、攻守ノ計画ニツキテ、別ニ大ニ考慮ヲ運ラサヾル可カラザルモノアリ、便チ一昨日初メテ柏崎ニ到着シ

昨日宮本ヘ繰込マシメ置キタル大垣兵ニ、直チニ関原ニ来ルベキ旨ヲ通ジ、英領ニ在ル所ノ兵ニハ、其地ヲ厳守スベキ旨ヲ達シ、小千谷ニ在ル所ノ兵ニハ妙見及ビ榎峠ノ険ヲ厳守スベキコトヲ達シ、石峠ナル松代及ビ尾州ノ兵ニハ、昨日ノ通達ヲ取消シテ、更ニ直チニ萱峠ニ赴キ守ルベキ旨ヲ達シ、栃尾ニ在ル加州ノ兵ニハ、其処ヲ厳守スベキ旨ヲ達シ、出雲崎ヘハ深入ヲ事トセズシテ、防守ノ手段ヲ取ルベキ旨ヲ達シ、更ニ柏崎ニ急使ヲ出シテ、交代帰休ノ為メ恰カモ同地マデ引揚ゲ居タル加州兵ノ、出発ヲ差止メシメタルノミナラズ、現ニ交代トシテ高田マデ来リ居レ

ル加州兵ノ、至急来着ヲモ促ガサシメタリ
鬼角スル中ニ、福原和勝今町ヨリ来リテ曰ク、今町ハ
尾州、松代、上田、高田ノ四小隊ヲ以テ之ヲ守リ居タル
ニ、昨夜敵兵不意ニ此地ニ押寄セタルノ報アリ、因ツ
テ見附ヨリ我三番小隊ヲ出シテ赴キ援ヒタルニ、我
我ノ到着シタル時ハ、已ニ戰爭ノ最中ニテ、直チニ決
戰ヲ為シタレドモ諸兵散乱シテ終ニ支フルコト能
ハズ、指揮官三好軍太郎、堀潛太郎ノ両人ハ傷ヲ被ムリ、熊野
直助ハ討死ヲ遂ケ、味方ノ全敗トナリタリ、勢已ニ斯
クノ如クナレバ、見附モ亦雄守ヲ以テ、策ヲ定メテ一
應引揚クルニ非ザレバ致方ナキニ似タリ、之ヲ如何

スベキヤト、因ツテ一先ヅ引揚ケテ固守スルノ外ナ
キヲ説キ、福原ハ直チニ長岡ヘ引返シタリ、夜福田狹
平出雲崎ヨリ帰リ、山田市之允モ共ニ来レリ、福田ノ
話ニヨレバ、昨日小島谷、島崎ヘ進撃シテ賊兵ヲ掃攘
シタルモ、地形宜シカラザルヲ以テ、夜中ニ出雲崎ニ
引揚ゲ、今日ハ乙茂口、山田口、剣ノ峰等ニ防守ラ置キ、
砲台ノ築造ヲ指圖シテ帰リタリトノコトナリ、便チ
福田ト快談ノ上、伊藤傳之助ヘ書ヲ送リ、石地ヲ根拠
トナシ、出雲崎ヲ前営トナシ、山田、島崎諸口ニ斥候ヲ
出シ、久田ニ砲台ヲ築キ、剣ノ峰ニ兵ヲ上ケルコトヲ
訓示シ、一ニ小隊ノ兵ヲ分ツテ、当方ニ繰リ戻スベキ

昔モ照會シタリ、山田ハ昨日ノ卯艦ニテ、乾行丸ト共ニ、新潟ニ赴キ見タルニ、外國船ハ一隻モ居ラザリシガ、夜中陸近ク棄リ寄セタレバ、陸ヨリ數十発小銃ヲ発射シタリト云ヘリ

信濃川ノ右岸ハ、已ニ今朝ヲ取ラレテ、見附モ亦安ルコト能ハズ、已ムヲ得ズ、兵ヲ引揚ゲテ川邊、千条、筒場、十二潟、大黒、福井、百束、清瀬、桂沢、森立峠、柝尾、半藏金等ヲ分守スルコトトナリタルガ、川辺ヨリ以南六十里越口並柳、宍沢、大白川邊ニ至ルマデハ、殆ンド十四五里アリ、而シテ左岸ノ戰線ハ、則チ出雲崎ノ海岸ニ延長シ、恰カモ越後ノ國ヲ半截シテ立ヲ守ルノ状アリ、

寡少ノ兵カヲ以テ、此ノ延長ヒル戰線ヲ守ル、誰カ寒心セザルコトヲ得ンヤ、援兵ノ到着ヲ待ツコト、大旱ノ雲霓ヲ望ムヨリモ急ナリ、然リ而シテ長州、土州、越前、加州ヨリノ出兵ハ、果シテ何時ヲ以テ来着スルヤヲ知ラザルナリ、因ツテ余ハ取リ敢ヘズ、最モ手近ナル越前兵ノ派遣ヲ促サント欲シ、前日已ニ其旨ヲ柏崎ニ申送リ置キタルモ、四〇日〇ニハ尚自カラ柏崎ニ赴キ、数日前ニ高田ヨリ同所ヘ出張セラレ居タル四條卿ニ拝謁シテ、越前出兵催促ノ御書翰ヲ請ヒ、柳川ノ蒸汽船ヲシテ、之ヲ持シテ三國港ニ赴キ、同船ニ載セ海ラル、丈ノ兵員ヲ迎ヘシタリ然ルニ恰モ好シカノ州人二名交替兵ノ上ト未ラシメントニツキテ高

田ヨリ来リタルヲ以テ、余ハ之ニ應接シテ、柏崎ニ在ル所ノ兵ヲ帰休セシメザルコト、及ビ高田ニ在ル所ノ兵ヲ、片時モ早ク関原ニ繰込ムコトヲ要求シテ之ヲ返シタリ

翌五日、余ハ再ヲ冒シテ関原ニ帰リタルガ、其翌朝、柏崎ナル湯浅祥之助ヨリ飛報アリ、曰ク、筑前ノ蒸汽船環瀛丸、我藩ヨリノ弾薬諸器械ヲ搭載シテ、昨朝今町ヘ着港シ、長府ノ警石隊五十人程モ、此ノ便船ニテ来着シタルヲ以テ、直チニ柏崎ニ回航スベキ旨ヲ通達シ置ケリ、今日ハ必ズ到着スベキナリト、僅々五十人ノ援兵ト雖ドモ、此際ニ於テハ極メテ貴重ナル援兵

ナリ、況ンヤ弾薬ノ供給ハ、過日以来頻ニ其ノ缺乏ニ困シミ、或ハ加州ニ或ハ越前ニ、屢々之ヲ借ルノ已ムヲ得ザルモノアリシニ於テヲヤ、此ノ報道ハ頗ル人意ヲ強クスルニ足ルモノアリシナリ、然レドモ遠カニ更ラニ強力ナル援兵ノ派遣ヲ得ルニ非ザレバ、到底前進ノ望ミナキノミナラズ、久シク現在ノ戰線ヲ維持スルコトモ亦頗ル困難ナルヲ以テ、余ハ便チ國元ノ政府及ビ廣澤参ニ書ヲ送リ、戰地ノ状況ヲ具述シテ、兵隊繰リ出シノ一日モ緩フスベカラザルヲ訴ヘタリ

其日重チテ湯浅ヨリ書簡アリ、報シテ曰ク、環瀛丸ハ

正ニ柏崎ニ到着シタリ、ミニエール弾薬八十餘万発、大砲四門、同弾薬千数百発、元込小銃、弾薬三万発ノ外梅干、香物、草鞋等山ノ如ク積ミ来リタルハ大ナル力ヲ與ヘタリ、而シテ此ノ便船ニテ来着シタル神保治助、日泉素助ノ語ル所ニ拠レバ、長州ハ国論愈ヨ確定シ、援兵トシテ千城隊四百人、遊撃隊五百人、奇兵隊ニ小隊、内匠太夫同家衆二中隊、砲隊トモ都合千百人当國ヘ出張ノ御沙汰アリ、是等ノ人員ハ、何時ニテモ出張ノ出来ル様、総テ萩表ニ揃ヒ居レドモ、奈何セン運送船ナキガ為メニ、未タ発スルコトヲ得ズト云ヘリ、依ツテ環瀛丸ニ相談シ水揚ノ済ミ次第、萩表ヘ帰航セシムルコトヽシタリト、同時ニ尤ノ世子君ノ御直書ヲ轉致シ来レリ

山縣狂助
并其外ヘ

当節其方共、於越後、粉骨連戰之趣相聞、実以神妙之至ニハ、其地ノ勝敗ハ、東辺官軍之氣力ニモ致関係ハ条、別而可遂其節ハ、督府ヨリ援兵器械ノ御催促有之ハニ付、早速運送申付ハ、兵隊之義ハ、迎船来ハ様、督府ヘ申入ハ、夫迄之処ハ、一身当万軍之心得肝要也

戊辰

夏五月廿六日

是ヨリ先キ、去ル四日、下越後五藩ノ家老、即チ新発田ノ溝口伊織、村上ノ股田藏人、村松ノ笹岡豹太郎、黒川ノ中野東一、三日市ノ須永半之丞、連署シテ一通ノ歎願書ヲ出雲崎ノ陣営ニ差出シタル由ニテ、出雲崎ヨリ直チニ之ヲ送致シ来リタルヲ見ルニ、會津ノ謝罪状ヲ紹介シ又五藩ハ勿論賊軍ニ與スルモノニ非ザルヲ陳述シ、併セテ越後水災ノ惨状ヲ訴ヘテ、休兵ヲ請フモノニシテ、固ヨリ深ク信用スルニ足ルモノニ非ズト雖モ、之ニ對シテ返答ヲ與フルハ、亦敵情ヲ觀ルノ一方便ナリト思惟シタルヲ以テ、余ハ便チ其

返書ヲ認メシメタリ其ノ概要ニ曰ク

松平肥後紀　天網、其罪不赦、既帰邑、以謹慎為名、集浮浪、驕獷隣境、故征戎之命下、越後五藩助其悪、罪亦同、然　天恩洪大、豈有不容帰降乎、況越後洪水、民艱不思禍、肥後謝罪之情、五藩連署之意、真実無偽、則各遣重臣一人、受命于出雲崎、云々

而シテ七日ヲ以テ之ヲ送致スルト同時ニ、余ハ親シク出雲崎ノ指揮者ニ意圖ヲ示シ置クノ必要ヲ感ジ、同地ニ赴キタルガ、其ノ翌日帰リ来レバ、適マ長岡ヨリノ報ニ曰ク、昨日ハ簡場ト十二潟トヘ、朝夕両度賊ノ来襲アリタルモ、両度ノ撃ツテ之ヲ破リタルガ、

今朝ハ賊又森立峠ヘ来襲セリ、勝敗ハ未ダ決セザルモ、半藏金最モ懸念ニ付、至急援兵ノ派遣ヲ請フト、因ツテ即時ニ加州ノ一小隊ヲ繰リ出シ、更ニ磐石隊ヲ挙ゲテ之ヲ長岡ニ遣ハシタリ、而シテ別ニ森立峠ニ人ヲ出シテ其状況ヲ見セシメタルニ、帰リテ報ズルヨウニ、加州、飯田ノ兵成メズシテ、一旦敵ノ為メニ砲台ヲ奪ハレタルモ、奇兵隊三番小隊之ヲ援ケテ激戰シ、午時頃遂ニ賊ヲ撃退スルコトヲ得タリト九日ニハ、共板ノ方面心ニカヽルコトタリ、且カラ同所ニ往復シタルガ、此方ハ幸ニシテ異状ナカリシモ、筒場、十二潟ノ辺ハ、前日来常ニ多少ノ交戰アリタリ、

大山桂西参謀ノ書翰ナリ 六月十日

而シテ十〇一〇日ニハ又出雲崎方面ノ敵情頗ル関心スベキモノアリタルヲ以テ、同処ニ出向キタルニ、其ノ翌朝ニ至リ、果シテ久田村其外三箇処ニ賊ノ襲来スルアリ、直チニ諸兵ヲ繰リ出シテ應戰セシメ、諸兵ハ孰レモ奮戰シテ、午後ニ時頃ニ至リ、全ク之ヲ撃退スルヲトヲ得タリ、此日松代ノ兵ガ善ク戰ヒタルヲトハ、余ノ激賞シテ已ム能ハザリシ所ナリ

此日、我ガ藩ノ藤村禄平ナルモノ、汎公ヲ二大山格之助ノ書ヲ携帶シ、久保田ヨリ潜カニ讃岐船ニ乗シテ出雲崎ニ来レリ、其ノ言フ所ニ曰ク、曩キニ榮料ノ反覆ニヨリ、一同非常ノ危急ニ陥リタルモ、幸ヒ久保田藩ノ

未ダ仙米ニ接ミロザルヲアリ、沢公以下九死ノ中ニ一生ヲ得テ、辛フジテ同藩ニ落チ行キ、隨従ノ薩長兵トモ、今現ニ同藩領ノ野代ト云フ所ニ在リ、然ルニ今マ已ニ弾薬ハ勿論、金子モ尽キ果テ、復タ如何トモスベカラザルノ窮境ニ陥リ居レリ、適マ官軍ノ越後ニ進入シタルヲ聞キ、未リテ危急ヲ報スルナリト、因ツテ余ハ取リ敢ヘズ、金子二千両ヲ差送リテ、目前ノ困難ヲ救フベキ旨ヲ約シ、急使ヲ柏崎ニ馳セテ金子ノ調達ヲ命ズルト同時ニ、雖モ一人直チニ出雲崎ニ出張スベキ旨ヲ命ジタリ、然ルニ十〇三〇日ノ早朝ニ、関原ヨリ帰陣ヲ促ガスノ使ヒニ接シ、急キ帰リ来ル

途中ニ於テ、岡千吉郎ノ早追ニテ柏崎ヨリ来ルニ會リ、便チ沢公以下ノ危急ノ状況ヲ語リ、至急ニ金子ヲ出雲崎ニ持参シテ、讃岐松ニ宛シテ、之ヲ野代ニ送致スルノ都合ヲ計ルベキヲトノ示談シ、岡ハ途中ヨリ柏崎ニ引返シタリ、後ニ柏崎ヨリノ報知ニヨレバ、金子ハ同日直チニ高田ヨリ之ヲ取リ寄セテ、福田科作ヲシテ出雲崎ニ持参セシメ、同時ニ弾薬ヲモ送リタル由、藤村祥子ハ、出雲崎ヨリ直チニ江戸ニ向ヒ、夫レヨリ京師ヘ赴クノ都合ナリシナリ

十〇四〇日ハ、未明タリ川袋ノ方向ニ当リテ、猛烈ナル銃声ヲ聞キ、餘程ノ激戦ヲ、想像セラレタルレバ、直

チニ休候ヲ差出シ見タルニ、川袋ニハアラズシテ、川
向ヒナル川辺ナリトノコトナルヲ以テ、其ノ休候ヲ
シテ、更ニ長岡ニ向ハシムルト同時ニ、取リ敢ヘズ加
州半小隊、砲一門ヲ元大島ニ派遣シ、急ナル所ヲ見テ
策應スベキ旨ヲ達シ、余モ自カラ元大島ニ赴キ見タ
リ、然ルニ此ノ方面ハ、先ヅ懸念スベキモノナシト思
ハレタルニヨリ、余ハ川袋ニ至リ、同処ノ兵ヲ以テ賊
ヲ横撃セントス、誰ニテモ一人元大島ニ出張シ、砲
声ノ最モ激シキ処ニ向ヒテ、加州兵ヲ引キ連レ行ク
ベキ旨ヲ、関原ニ云シ遣リ、轉ジテ川袋ニ至リ見レバ、
川辺ノ賊ハ已ニ退却シ居リ、筒場ナ二潟ノ方ニ尚砲

声ヲ聞クノミナリシ、因ツテ余ハ関原ニ帰リ来タレ
バ忽チ福原和勝ノ長岡ヨリ来ルアリ、曰ク、今朝ハ川
邊、十二潟、筒場何レモ戦争アリ、就中筒場ハ最モ激烈、
ナリシガ、此ノ激戦ヲ引起シタルハ、全ク高田兵ノ臆
病ナリシ為メニテ、当初木馬ノ台場ヲ守リ居タル高
田ノ半隊、一戈ヘモナサズシテ其ノ守リヲ捨テ、長岡
附近マデ逃ケ退キタルヨリ、筒場ノ防禦太ダ困難ト
ナリ、薩兵ノ死傷最モ多ク、隊長及ビ半隊長ヲ併セ失
フニ至レリ、長ノ八番小隊其他應援シテ、遂ニ賊ヲ撃
退スルコトヲ得タリトノ由ドモ、高田兵ニ對スル長岡
ノ議論ハ甚ダ激烈ニシテ、何分ノ処置ヲ請ハザル可

カラズト、是ニ於テ種々評議ノ上、右高田兵ノ司令前田門之亟ニ謹慎ヲ申付ケルコトヽナリ、尤ノ通リ申渡サシメタリ

前田門之亟

右六月十四日暁、長岡口川辺、十二潟、簡場等ヘ賊兵襲来ノ砌、尤右ノ台場ニ不拘、大黒ノ持場ヲ引退散乱セシメ、臆病ノ所業、総軍ノ士氣ニ関係スル而已ナラズ、薩藩等ノ死傷等モ、畢竟右不始末之致ス所、此旨高田表ヘ申達シ、何分之御処置有之ル迄、先慎申渡ル事

而シテ同時ニ尤ノ書付ヲ附シテ、之ヲ諸藩ニ布告セシメタリ

別紙之通申渡ル、不切可被成ル、益士氣ヲ奮励シ、持場ヲカタメ、必死戦、尽戦ヲ不怠様、可有御心得ル以上

右ノ前田門之亟ニハ後数日ヲ経テ

右過ル十四日、大黒台場戦争之御、不始末之所業ニ付、厳罰可申付処、両藩中歎願之趣モ有之、此度之義ハ、格別寛大之処置ヲ以、指揮後被差除、卒伍ニ貶ル

シ他日之功績相試可申段、申渡ル事

ト云ヘル申渡シヲ為シ、尋ヲ諸藩ヘモ之ヲ布告セシメタルガ、同人ハ其後ヲ何レカノ合戦ニ於テ討死ヲ

遂ケタルヤニ、記憶シ居レリ

此日ハ桂沢ニ於テモ、曉来タリ砲戰タリ、正ノ時ハ頗ル激戰ニシテ、死傷モ多クタリタル由、同処ノ大垣兵ヨリ報知アリタリ

黒田了助ハ、先月十四、五日ニ小千谷ニ来リタル後モ、引續キ病氣ニテ、今日マデ同処ニ留マリテ、静養ヲ為シ居リ、従ツテ渕辺直右衛門ガ黒田ノ代理者トモ云フベキ地位ニ立チ、長岡ニ在リテ専ラ軍務ニ執掌シ居タルガ、黒田ノ病氣モ粗平癒シタル由ニテ、今日始メテ小千谷ヨリ関原ニ来リ、尋ヌ又長岡ニ赴キタリ

十四、五日、桂沢ノ大垣兵ヨリ人ヲ遣シ来リテ曰ク、昨曉

ハ賊兵雨霧恐レヲ辨セザルニ乘ジテ、本道并ニ山手ヨリ襲撃シ、味方死傷多クシテ、遂ニ支フルコトヲ得ズ、戰ノ為ノ山上ノ砲台ヲ奪ハレタリ、如何ニモ残念千万ナルノミナラズ、一旦此ロノ破ルヽニ於テハ、諸口皆ナ保チ難キヲ以テ、是非トモ川袋ニ在ル処ノ同藩兵ヲ桂沢ニ派遣セラレ、大垣兵ノ全力ヲ以テ之ヲ恢復スルコトヲ許サレタシト、莫言聽クベキモノデハアルヲ以テ、便チ川袋ニ出張シテ、其ノ守備ヲ檢視シタシ、岩村精一郎川袋ニ出張シテ、其ノ守備ヲ檢視シタリ、然ルニ午後三時頃ニ至リ、長岡ヨリ報タリ、桂沢ノ砲台ハ立ヲ恢復スルコトヲ得タリト云フ、然レドモ

川袋ノ兵ヲ減シタルヲ以テ、特ニ英叔ニ報シテ川手ノ守備ヲ嚴重ニセシメタリ

曩キニ余ガ柏崎ニ於テ四隊公ノ出兵催促ノ書ヲ請ヒ、之ヲ持シテ三國港ニ航行セシメタル柳川ノ蒸汽船環瀛丸ハ高倉四隊両公ノ宛タル越前侯ノ書翰并ニ其藩ヨリ我々両参謀ヘ宛タル書面ヲ携ヘテ、十〇五〇日〇ニ柏崎ニ帰着シタル由ニテ、其翌十〇六〇日〇ノ早天ニ、柏崎ヨリ其書面ヲ轉致シ来リタルヲ見レバ、出兵ノ儀ニツキテハ、卿カ存寄モ有之、重テ京師ヘ重臣ヲ出シテ伺ヒ中ナルヲ以テ、直チニ之ニ應スルヲ得ズトノコトナリ、然レドモ柏崎ヨリノ報知ニヨレバ、右環瀛丸ガ去ル十〇三〇日〇ニ、將サニ三國港ヲ出帆セントスルニ際シテ、福井ヨリ急使アリ出先キヨリ危急ノ報知頻々タルニヨリ、京師ヘ伺ヒ中トハ云ヒナガラ、坐シテ官軍ノ危急ヲ見ルニモ忍ビザルヲ以テ、先鋒ノ兵丈至急繰リ出スコトニ議論決定シタレバ、此事ヲ報シ置ク様トノ口上ヲ傳ヘ、人数ト日限トニツキテハ、未定ナル旨ヲ答ヘタル由

右ノ始末ナレバ、越前ノ出兵ハ到底頼ム時ニ足ラザルヲ以テ、環瀛丸ヲシテ萩ヘ回航セシメ、長州ヨリノ援兵ヲ迎ヘ来ルノ、寧ロ捷径ナルベキヲ思ヒ、柏崎ニ其旨ヲ伝ヒ遣リタル折柄、長岡ヨリ藤矢三小隊東岩瀬

マデ到着シタルヲ報シ、軍艦ヲ出シテ之ヲ迎ヘ来ランコトヲ依頼シ来リタルヲ以テ、便ケ環瀛丸ヲシテ先ヅ東岩瀬ニ回航セシハルコト、シタリ

此日西園寺、四條ノ両公、同行シテ関原ニ来ラレタリ、両公ハ戦地実見旁軍隊慰労ノ為メ、去ル十〇四〇日ノ夜ニ、柏崎マデ来ラレ、本日関原ヘ来リ給ヒシニテ、十〇七〇日〇ニハ、怪我人ノ養生所（今日ノ所謂ユル野戦病院又ハ兵站病院ナリ）ヲ視察セラレ、十〇八〇日〇ニハ、諸藩ヘ慰労ノ書ヲ賜ハリタリ、其文ハ

長岡落城後、連戦無虚日、殊ニ悍強之賊ト、對壘連旬、不得已遂苦戦ハ数、実不堪感激、因馳一夫、聊慰軍労、猶

直様朝廷ヘ可及奏聞ハ也

ニシテ、岩村田、松本、高崎、高島ヘノ分ハ、遂苦戦ノ三字ナク、松代ヘノ分ハ、別〇而〇粉〇骨〇ノ、四字多カリシ、ナリ蓋シ松代兵ノ善ク戦ヘルハ、前記十二日ノ出雲崎方面ノ戦ヒノミニ非ズ、要スルニ出征軍中薩長ニ次ギテ最モ訓練セラレタル精兵ナリシコトハ、爭フ可カラザルノ事実ニシテ之ニ對スル慰労ノ書面カ他藩兵ニ對スルモノト稍趣キヲ殊ニシタルハ、固ヨリ余等ノ進言ニ出デタルナリ

而郷ハ、十〇八〇日〇ニ長岡ニ赴キ、十〇九〇日〇ニ柏崎ニ帰ラレタルガ、余ハ其ノ帰ラル、ヲ送リテ後チ、英板ニ赴キ、

「長ノ千城隊一隊同乗セシ様。思ヒ出ス」

帰リ来レバ、相崎ヨリ報アリ、曰ク、今朝筑前ノ蒸汽船大鵬丸、奇兵隊二小隊ヲ載セテ着港シ、片野十郎、三浦梧楼等到着シタリ、而シテ来着ノ兵隊ハ、今夜半ニ相崎ヲ出発シテ、当地ヘ向フ筈ナリト

新来ノ奇兵隊ト千城隊トハ、斯クテ其ノ翌朝、即チ廿日ノ朝ヲ以テ、関原ニ到着シタルガ、此ノ兵員ヲ載セ来リタル大鵬丸ハ、直様萩ヘ帰航シテ、更ラニ援兵ヲ積ミ来ルコトヲ相談整ヒタルノミナラズ、柳川ノ紙瀧丸モ亦、薩兵ヲ載セテ東岩瀬ヨリ帰着次第、同シク萩ヘ回航シテ、援兵ヲ迎ヘ来ルノ都合トナリ居ルヲ以テ、此後ハ最早従前ノ如ク、兵数ノ寡少ニ苦ミムコトモナカルベク、従ツテ防守ノ勢ヒヲ一転シテ、進攻ノ策ヲ取ルコト適当ナルベシト思惟シ、略々作戦ノ計画ヲ立テ、福田ヲシテ長岡ニ到リ、黒田其他ト懇談ヲ為サシメタルモ、長岡ニテハ議論未ダ一定スルニ至ラズ、福田ハ尚他日ヲ期シテ、関原ニ帰リ来レリ

此日西園寺公ヨリ九ノ書面ヲ送ラレタリ

暑氣推凌ハ如何、日々御苦慮察入ル、一昨日ハ初面會、戰地情実具ニ承、只々令感佩ル、陳者只今従輔相書輸到来致ル、ニ付、則入一覧ル、別紙件々篤ト被相含、可然、布告頼入ル、仍而右申入度、草々不具

六月廿日　公望

両参謀

右書中ニ輔相ヨリノ書輪トアルハ、即チ京師ナル岩倉公ヨリノ書輪ニシテ、兵部卿仁和寺宮ガ越後口総督ヲ仰付ラレ給ヒ、西園寺、正親町両卿其ノ参謀ヲ仰付ラレ、吉井参輔当宮ヲ以テ出張ヲ仰付ラレ、楠田十右衛門副参謀ヲ仰付ラレ、戸倉修理亮、荒尾駿河、松平源太郎三人軍監ヲ仰付ラレタルコトヲ報ジ、長州ヨリ千人、薩州ヨリ三百人、肥前、上総ヨリ五百人、越前ヨリ千人、因州ヨリ百人餘、備前ヨリ百人餘、御親兵ノ内二三百人、吉川ヨリ三百人、土州ヨリ二百人、至急出兵ノ

ヲトヲ報ジタルモノナリ

西園寺公ノ関原ニ来ラレタルハ、関原ニ於テ筆記セラレタル奇兵隊ノ日記ニ依ルモ、柏崎ニ於テ筆記セラレタル同日記ニヨルモ六月ノ十六日ナリシニ相違ナク、当時関原ニ在リタル余ガ、謁見セザリシ筈ナキモノ柳ラズ、右ノモノ付ノ書面ニ、一昨日ハ初面會トアルハ、其意ヲ得ザルコトナリ、因ツテ更ニ関原ニ於テ筆記セラレタル奇兵隊ノ日記ヲ按ズルニ、六月十六日ノ條ニ、西園寺四條二卿、間行柏崎ヨリ御着、右之段黒田了助ヘ長岡ヘ報ジ遣シ、尚得共、足痛ヲ以テ謝スル記事アリ、便チ黒田ハ両

御ガ十〇八〇日ニ長岡ニ赴カレタル時ニ、初メテ謁見シタルモノニシテ、西園寺公ノ書ハ、両参謀ニ宛テレタルモノナルヲ以テ、斯ク書カレシモノナラン

十〇一〇日ノ出雲崎ヨリノ報ニ曰ク、過日来賊近村ノ濱手ハ数個所ノ台場ヲ築キ、機ヲ見テ来襲セントスルノ模様アルニヨリ、我レヨリ先ンジテ之ヲ撃破セント欲シ、丁卯九ト協議ノ上、一昨十〇九日暁矢ヨリ、下知ハ落水村ノ濱手ノ台場并ニ山田村迄ヲ砲撃シ、陸軍ハ濱手ト山手ト両道ヨリ之ヲ合撃シタリ、味方ニハ一人ノ死傷ナカリシモ、賊ノ方ニハ多少ノ死傷アリ、村上勢ノ指揮役一人ヲ討取リタリト、此夜十二潟、筒

場ノ方向ニ当リ、激烈ナル砲声ヲ聞キタルヲ以テ、人ヲ川袋ト長岡トニ出シ其ノ模様ヲ見セシメタルニ、例ノ通リ砲台上ノ撃合ニテ、別ニ異ナリタルコトナシトノ報告ナリシガ、念ノ為メ三吉大郎ノ一小隊ヲ元大島ニ繰リ出シ、機ヲ見テ進ムベキ旨ヲ命ジ置キタリ

十〇一〇日ノ暁矢ニ至リ、果シテ長岡ヨリ急報アリ、曰ク、昨夜筒場辺ニテ交戦アリ、賊福嶋ニ潜入シテ火ヲ放チリ、速カニ奇兵隊ノ救援ヲ請フト元大島ニ繰リ出シ置キタルニ三吉ノ隊ハ、今暁已ニ戦場ニ赴キタルヲ以テ、愛ニ三浦梧楼ノ隊ヲモ元大島ニ繰リ出スコトヽ

シ、余モ片野十郎ト共ニ同所マデ出張シタリ、然ルニ同所ニ於テ接手シタル所ノ報道ニヨレバ、福島ノ砲台ヲ固メ居タル富山兵ガ敗走シタル所ヘ、千城隊二小隊進戰シテ賊ヲ邀擊シ、三告ノ隊モ赴キ援フテ、遂ニ福島ヲ取リ返シ、一旦賊ヲ追フテ前進シタルモ、機ヲ見テ引揚ケタリト云ヘリ

然ルニ又半藏金ヨリ急報アリ、曰ク、今朝六ツ時ヨリ開戰、松代、松本、尾州等ノ持チ場皆ナ賊ノ爲メニ破ラレ、是レラノ諸藩兵ハ孰レモ西ノ山ニ上リ、賊ハ東ノ山ニ上リ、双方相對シテ今尚交戰中ナリト、西ツテ三浦ノ隊ヲシテ此ノ方面ニ向ハシメント欲スルモ、斯

クテハ元犬島ノ方無人トナルベキヲ以テ、久保無二三ヲ長岡ニ遣ハシテ、三告ノ隊ヲ当方ヘ引戻スコトヽナシ、余ハ薄暮前関原ヘ帰リタリ、又保無二三ハ片野、三浦等ト同船ニテ、先日来著シ居タルナリ

又相崎ニ急報シテ、兵員来着次第直チニ当方ヘ繰込ムベキ様、取計ヒ方ヲ命ジ遣リタルニ、其翌日使ヒノ者ノ帰リ報スル所ニヨレバ、環瀛丸ハ昨夜薩兵三百人ヲ載セテ相崎ヘ帰着シ、此ノ薩兵ハ、本日長岡ヘ繰リ込ム運ビトナリ居ル由、差、人意ヲ強クシタリ

然レドモ敵ノ情勢ハ、上文記シ来タレルガ如クニシテ、官軍ノ勢カハ一朝ニ増加スルコトナク、特ニ其ノ

首カタル薩長ノ兵ニ至リテハ、遥ニ長ノ磐石隊四十名、千城隊一中隊、奇兵隊二小隊ガ来リ加ハリタルト、本日薩ノ三百人ガ来リ加ハリタル丈ニテ、到底遠カニ蕩平ノ功ヲ奏スルノ望ミナク、加フルニ、余ノ観察スル所ニテハ、薩ハ専ラ東國ニ力ヲ用ヒ、従ツテ越後ノ方ハ、自然長ニ、於テ、専ラ、力ヲ、用ヒザル、能ハザルノ状況アリ、因ツテ分ハ更ラニ遠カニ長州ノ兵ヲ招致セザル能ザルヲ感シ、東岩瀬ヨリ帰リタル環瀛丸ヲシテ、草々萩ニ回航セシムルノミナラズ、更ラニ又当時函館ニ在ル所ノ長州ノ漁船華陽丸ヲ招致シ、之ヲシテ兵隊及ビ輜重ノ運輸ニ任ゼシメント欲シ、其ノ

旨ヲ柏崎ニ云ヒ送リテ、其都合ヲ取計ハシムルコトトシタリ、華陽丸ヲ招致スルコトハ、片野十郎ガ國許ヲ出発スルニ際シテ、蕃ノ政府ヨリ差支ナキ旨ヲ領シ来リ居タルヲ以テナリ

此日半藏金ヨリ昨日ノ交戰ニツキテ詳報アリ、曰ク、朝六ツ時頃賊軍東ノ山ノ手ト北山ノ中腹トヨリ砲撃ヲ開始シタルニヨリ、長ノ十番小隊坊尾口ヘ繰リ出シタルニ、坊尾ヨリモ亦優勢ナル賊軍ノ押寄セ来ルアリ、從ツテ三方ニ敵ヲ受ケ、戰ヒ頗ル困難トナリシモ、松本兵ト十番小隊トハ東山ニ上リ、尾州兵ハ北山ニ上リ、双方共ニ夜明ケ頃ニ賊ヲ撃退シタリ、然ル

ニ松代ト尾州トノ持チ場モ、始メヨリ敵ノ攻撃ヲ受ケ、就中松代ノ台場ハ、其ノ前面ノ山上ニ敵ノ上リタルヲ為メ、非常ノ苦戰トナリ、才番小隊ハ其敵ヲ撃退セントシテ山手ニ進ミタルニ、却ッテ賊ノ為メニ取囲マレ、苦戰激闘中ノ又マデ進ンデ賊ヲ追ヒ、轉戰シテ森上邊ニ出デ、松代、尾州モ亦進撃シテ、賊ヲ中村辺マデ撃退シタルハ、午後七ツ半時ナリシト

長岡方面ニ於ケル同日此ノ兵ノ配置ハ左ノ如シ

川邊　薩四番一小隊　上田一小隊

黒津　高田一小隊

下条　加州半小隊

福島　富山一小隊　一砲門

十二潟　長一小隊警右隊共　加州一小隊

二砲門

池島渡口　薩才番一小隊　田ノ口一小隊

箭場　薩一小隊　二砲門　加州一分隊　臼砲

大黒　薩才番半小隊　高田一小隊

乙吉　高田一小隊　上田一小隊

浦瀬　高田半小隊

桂沢　大垣三小隊　松代一小隊

臺　長四番一小隊　二砲門

桂、沢　松代一小隊　二砲門

森立峠　長三番一小隊
飯田一小隊　二砲門
間道　高田半小隊
柳村　尾州半小隊
半藏金　長十番一小隊
隊　尾州一番隊　加州一小隊
廣瀨谷　松本二小隊　高崎一小隊　二砲門
高島一小隊　二砲門　加尾一小隊　二臼砲
隊　尾州一小隊

加州一小隊一分隊

松代一小隊
松本一小隊

越ノ山風

自六月廿四日
至七月廿五日

廿四日ノ朝ニハ、兵板ト出雲崎トノ中間ト思ハル、邊ニ当リテ、烈シキ砲声ノ聞ヘタルヲ以テ、或ハ賊徒ノ逆谷ヘ闖入セルドモニハ非ズヤト思惟シ、一面ニハ休候ヲ出シ、一面ニハ援兵繰出シノ手筈ヲ整ヘ居タルニ、其候ノ帰リ報スルガニテハ、兵板邊ニアラズトノコトナリシニヨリ、更ニ人ヲ出雲崎ニ出シ、余ハ片野ヤ郎ト共ニ、兵板マデ出張シタリ

然ルニ間如ニテ接手シタル伊藤傳之助ノ飛報ニヨレバ、我ガ諸砲台ハ、曉天ヨリ賊ノ来襲ヲ受ケ、頗ル苦戦ニテ、彼ガ退却ヲ為スニハ至ラザレドモ、諸口ニテ

ハ已ニ廿餘人ノ死傷ヲ、加州ノ隊長水野德三郎モ討死シタリトノ事ニテ、形勢頗ル閑心スベキモノアルヲ以テ、便チ長一小隊、薩一小隊ヲ應援トシテ浜板ヨリ出雲崎ヘ出ン、潮泉ヘ詰ジテ三吉大郎ノ隊ヲ、眼野所マデ繰リ出サシメタリ、而シテ余ハ其ノ翌日、片野ト共ニ出雲崎ニ至リ見タルニ、昨日以來ハ、別ニ敵兵ノ大擧シテ來襲スベキ模樣モナク、防禦ノ手筈モ大略整ヒ居レルヲ以テ、一汐ノ後チ、浜板川袋ヲ經テ、関原ニ帰リタリ

尤ニ掲クル廣沢ノ書翰ハ、其ノ前日ニ関原ニ達シ居タルモノナリ

本月三日五日両度之御書翰相達ハ、先以炎熱之候、弥以御忠壯被成御滞陣、御隊中一統強壯御勉励之段、欽慕此事ニ奉存ハ先頃長岡城御奪取以來、僅一両日御休兵ニテ、五日頃迄連日御苦戰之段承知仕、実ニ北越一万有餘之大兵中、必勝ヲ期シ無情怠惰躬尽力ハ、何地モ薩長二藩之兵而已ニ有之、去月十一日長岡城御攻撃以後之引續御苦戰之程ハ、奉遠察、誠ニ魂氣好永陣ニ堪ヘ、少モ不顧死生勉励之段、所銘之至奉存ハ、縮ル処、先生初諸長官之尽力ニ有之ト相考、依ル此上弥以御氣長ニ御攻撃、御成功奉待ハ、北越督府ヨリ御國之兵隊御催促之折柄、於当地

同様之　御沙汰被
御國之兵力ヲ尽シ、東　仰出、御請相成ハ上ハ、成り丈
相成不申テハ、不相濟次第ハ、今更不能演説、就テハ
毛利内匠殿、佐世八拾郎、其外千城隊四百人余一大
隊、砲隊半座、其御隊先達而上京之部八十人共、合六
百人余、已ニ去月廿九日比、於萩港、筑前藩、藻艦ニ乗
組都合ニ相決ル段、先達而御意置ル以後、猶又御國
ヨリ、并ニ昨日筑藩ヨリモ報告有之ル事ニ付、多分
五日御投錨後、疾其御地着陣相成り、少シハ御援兵
之扶助ニモ相立、連日疲労之御手替モ相整ヒ可申
哉奉遠察、実ニ一日千秋之御情実奉察、右着陣之有

無確報相待而ハ、耳、勿論奥羽征討ニ付テハ、東北二道
之一ツニテ、漸々相進ミ、若松本城ニ相迫ニ隨ヒ、多
分御難戰モ可有之ニ付、精兵御繰込之事ハ、於軍務
官無疎詮議相成り、已ニ薩兵増出張ニモ相成り、是
又不遠着陣可有之、從御國モ今一大隊御差出之
御沙汰相成り、其外岩國ニモ同断、肥、土、越等ヘモ同
断、追々多人数可相成、殊更　仁和寺宮御出陣被仰
出、一両日中ニハ、当地御発馬之御都合、旁御心強被
思召、充分被為相働、遠ニ御成功奉万祈ル、イツレ当
度ハ、東北共充分精兵被差向、八月中ニハ、必ズ成功
ヲ期シ仕事ニ御座ル、依而関東モ、御國先御供之第

一、二大隊被差向、薩公モ過日御発馬、一應御帰國ニテ、大兵御引纏ヒ、不日御東下之御都合ニ被為在、何モ必勝ヲ期シ申事ニ御座ハ、猶委細之儀ハ、別紙ヲ以得御意ハ、不具、恐惶謹言

六月十六日

二陳、不能申、天時御加護、御勉励奉万禱ハ、死傷ハ勿論、炎暑中平病人モ多分可有之、乍失敬、長官初、隊中ヘ宜御致意奉願ハ、可祝

兵助拝

狂助大兄

膝下

別封、了卯九ヘ御届可被下ハ事

奥白河城回復後モ、去月廿五六日比、度々戰爭、賊敗走スレドモ、未ダ官軍寡少ナルヲ以テ、其往キニ不進由、仙臺ヘ問罪師モ、本月十一二日比江城、会、白河城口ヘモ、同日比同地ヨリ追々出兵ス、江城以西東海、東山ハ大ニ鎮定、王政御威令モ段々相立ヨシナリ、（此ノ一節ハ胃頭ノ処ヘ細字ニテ傍書シタリタルモノナレドモ渕寫ノ都合ニヨリ茲ニ録スルヨト、シタリ）

同時ニ水戸ヨリモ来書アリタレドモ、今ハ手許ニ存在セズ

曩キニ岩倉公ヨリ西園寺卿ヘノ内報ト云ヒ、今又廣

沢ヨリノ来書ト云ヒ、共ニ援兵ノ陸続トシテ当地ニ来ルベキヲ報道スルト雖ドモ、先月、ノサ九日ニ、萩港ヲ出帆スル都合ナリシ千城隊其他スラモ、本月ノサ日頃ニ至リテ、其ノ一部分ガ、始メテ当地ニ到着シタルニ過ギズ、運送船ノ不足ナル、実ニ慨歎ニ堪ヘザルモノアリ、仁和寺宮ガ大兵ヲ率ヰテ来陣シ給フモ、恐ラク来月ノ中旬頃トナラン乎、京師ニ於ケル先鋒諸氏ノ苦心ト尽カトハ、固ヨリ感謝ニ堪ヘザレドモ、寡兵ヲ領シテ戰場ニ在ルノ我々ニ於テハ、援兵ノ来ルヲ待ツ、真ニ一日三秋ノ感アルヲ免カレザリシナリ然ルニ、其翌ヒ七日、相崎ヨリ急信アリ、昨日黄昏、環瀛丸ガ千城隊ニ中隊ヲ搭載シテ着港シタル旨ヲ報ジ来レリ、而シテ此ノ千城隊ハ、ヒ、七、日ノ晩景ニ相崎ヲ出発シテ、翌朝関原ニ来着シタルガ、毛利内匠、他世八拾郎（即チ前原一誠ナリ戰地ニテハ他世ト云ハズシテ前原彦太郎ト云ヒ居タリ）モ共ニ来陣セリ、依リテ其ノ二小隊ヲ、取敢ヘズ長岡ニ繰リ出シ、一小隊ヲ共板ニ繰リ出シタリ

是ヨリ先キ、長岡ニテハ、杉尾ノ賊巣ヲ撃破セントスルノ議、ヤリ、去ル七日ヲ以テ之ヲ実行セントシタルモ、適マ箭場、ナニ潟等ヨリ賊ノ来襲アリタルガ為メニ中止トナリ、其後モ防戰ニ急ニシテ、未ダ攻勢ヲ取ル

に違ひなかりしが、今や薩長の兵前後に来り加はり、加ふるに八日に松本藩の一小隊も、其の本国より当地に繰り込み来り、官軍の勢力復た三週間以前に比べ非ざるを以て、余は須らく守勢を縛じて攻勢を取るべきを感じ、先づ枋尾に向ひて一撃を試みんと欲し、ぜ、九日に福田を以て長岡に至り進撃の策を協議せしめたるに、黒田其他も別に異議なかりしが、福田は愈、明朝を以て進撃するの決議を齎らし帰り来れり

此日吉井幸輔来着せり、吉井は先般御買入になりたる軍艦摂津艦に乗りて、昨日柏崎に到着したるが、別

艦にて御親兵の内十津川兵二中隊を連れ来り、右兵は今夕妙法寺に宿し、明朝当地へ繰り込むの都合なりと云へり、依つて右兵は都合により、直ちに長岡へ繰り込まるること、議を為し置き、余は福田と共に長岡に赴き、七月三日に関原に帰りたり、翌日に於ける枋尾方面の攻撃につぎては、音兵隊の報告書によりて、概要を左に抄出す

七月朝日、枋尾の賊を一掃せんと議し、森立峠より我三番小隊薩州、加州、千城各一小隊進撃、一の貝の賊と戰と、辰の刻に至り、砲台四五個所を奪ふ、我三番小隊右手の太平山に登る、賊荷比に走る、我兵

追テ椽尾ヨリ十餘町前マデ進ミ又戰フ、地形悪シキヲ以テ、一ノ貝比礼両口ヘ引揚、枋窪峠ヨリ我四番小隊、薩州、松代、千城各一小隊進撃、椿沢ノ間道ヲ取切リ賊ト戰フ、我兵賊ノ砲台後ノ山ニ上ル、賊遂ニ走ル、生擒一人、遷延ハアリ、半藏、金ヨリハ、我十二番小隊、松代、報國各一小隊進撃、西中ノ又ニテ戰半日許、賊ヲ破リ、田ノ口ヨリ荷比ニ出デ賊ト對峙ス、箭場、千二潟ノ兵モ枋尾口ニ築應進戰セント

二日夜未ダ明ケザルニ、賊ヨリ大黒ノ砲台ヲ急撃ス、千城、高田、龍岡等ノ兵激戰之ヲ却ク、賊ノ伏屍三

イ餘

二日ノ朝大黒ニ於ケル高田兵ノ奮戰ハ、余ノ感歎ニ堪ヘザリシ所ニシテ、其ノ台場外ニ突出シ、抜刀ニテ賊陣ニ切リ込ミタルガ如キ、去ル十四日ニ一支モ為サズンテ、砲台ヲ捨テ去リタル兵隊トハ、全ク別物ノ如ク思ハレタリ、蓋シ先日ノ恥辱ヲ洗雪セントスルノ念ハ、彼レラヲシテ斯リ如ク勇敢ナラシメタルナラン、此日高田兵ノ死傷シタルモノ、実ニ十餘人ノ多キニ及ビシナリ

此日西園寺卿ヨリ九ノ書翰ニ接シタリ、是ヨリ先キ、西園寺、高倉両卿ヨリ、柏崎ヘ御轉陣相成度由ニテ、御

尋ノ趣キヤリ、御任意ニナサレテ然ルベキ旨ヲ奉答シ置キタルニ、卿ハ昨二日ヲ以テ愈ヨ相崎ヘ轉陣セラレタルナリ

軍務多忙之処、益御安康珍重存ル、然者過日岩村精一郎儀ニ付投書之旨、逐一令承諾ル、其節委曲申達ル通、関東監察三條尤水将ヨリ教諭モ有之、旁以今般改而公望附属軍曹ニ申付ル、尤動方総而是迄之通可相心得、是亦相達置ル、且又外ニ軍曹一人差遣ル条、精一郎同様可然指揮頼入ル、仍而右態々如此ル頓首

七月三日　公望

山縣狂介殿

二白　過日申入ル通リ、則昨二日相崎表ヨリ轉陣致ル、此表申入ル、猶尚日其表迫進軍之心得ニ有之ル間、都合次第可被申聞ル、委細之義ハ、精一郎ヘ申含置ル間、聞取頼存ル也

三日、公望　隨従之軍曹名前

精一郎同伴　中川秀之助
　　湖川忠之助
　　飯田　種彦

任序申達置ル

四日、只今関東ヨリ飛翰到来、別紙之通申来ル、是

ハ過日参謀ヨリ教諭ニ付、直ニ東山道ヘ攻撃ニ
可相成、督府ヘ言上致ハ、御返答也

右書中ニ所謂ル関東ヨリ飛翰ハ、尤ノ通リニシテ、
大村益次郎ノ自筆ニテ認メタルモノナリ

先般長岡落城後、賊兵頼陰、官軍人少、昼夜御苦戦ノ
段奉察ハ、就テハ乗輿早々進軍之段、被仰越ハ、御尤
之事ニ存ハ、実ニ長途之後ハ、府内八州賊ノ蔓延、処
々ニ必集、御同様官軍人少ニ付、東奥進軍モ出来兼
ハ処、先般上野山内帰擁之後ハ、更ニ府内八州ニ顧
眄之患無之ニ付、追ミ東奥ニ手ヲ下シ、已ニ廿四日
白川口進撃、棚倉ニ向ヒ、海濱ヨリハ、去十七日ヨリ

岩城平、相馬ヲ指テ、官軍千人、明廿八日、更ニ岩城平
ヘ千人出兵、依而不日更ニ仙台ヘ攻撃之手配有之
ハ、何分江府ヨリ仙台ヘ、道程百四十里、海路二百里
餘、進軍之時日苧延、就テハ其御地ヘ徹兵輜艱、毎々
御苦戦之段、傳聞不致ニ無之ハ得共、遠隔之地形、殊
ニ蒸流船極而沸底、苦慮此事ニハ、然ルニ七月中ニ
ハ仙台ヨリ在内追後城、賊兵掃擁之手配ニハ間、猶
此上御憤戰是祈

岩村精一郎ノ進退ニツキテハ、当時余ノ苦心シタル
コト、頗ル少ナカラザリシタ以テ、茲ニ其ノ概要ヲ記
サンニ、初メ六月ノ六日ナリシ、館林人ニテ水呂子善

兵衛ト云フ者、北越軍監ノ命ヲ領シテ、江戸ヨリ来着シタルニ就テハ、岩村ハ其ノ軍監ヲ罷メラレタル姿ニテ、直チニ引退スベキ旨ヲ申出タレドモ、久シク信州諸藩ノ指圖ヲ為シ、其ノ情実ニモ通ジ居レル岩村ガ引退シテ、何ノコカリモナキ新来ノ人ガ、之ニ代ルニ於テハ、其ノ不便ナルコト云フ可カラザルモノアルヲ以テ、余ハ岩村ヲ越後ニ留メ、信州諸藩ノ駆引ヲ命セラル、様、高田表ナル督府ヘ上申ヲ為シタルニ、之ト同時ニ岩倉郷ヨリモ、岩村ヲ召返サル、ノ使トアリ、其ノ使ヒノ言フ所ニテハ、何カ御不審ノ廉モアリトノコトナリシカバ、岩村ハ即時ニ帰途ニ就クベシト云ヒ張リ、曩ニハ小千谷ニ於テ責君ノ叱責ヲ蒙ムリ、今ハ又岩倉郷ヨリ不審アリト云ハル、何ノ面目アリテ、此地ニ留マルヲ得ンヤト云フ、其ノ心情亦頗ル氣ノ毒ナルモノアリ、依ツテ余ハ岩村ガ越後進入以来功アリテ罪ナキコト、及ビ今日突然岩村ヲ召還セラル、ニ於テハ、信州諸藩ノ兵或ハ統一ヲ欠クニ至ルノ虞レナキニ非ザルコトヲ縷述シタル書面ヲ認メシメテ、之ヲ岩倉郷ノ使者ニ渡シ、岩村ニ懇諭シテ戰地ニ留マラシメタリ、尋デ岩倉郷ヨリ関八州ト奥羽トハ江戸ヨリ指揮シ、越後表ハ朝廷ヨリ直接ニ御指揮アラセラル、コトナリタル今日、岩村ガ依

然トシテ東海道軍監ノ名目ヲ有スルハ穩カナラザルヲ以テ、宜シク其ノ名目ヲ改ムベシトノ旨ヲ申来リ、西園寺卿ヨリハ、仁和寺宮様御着マデ依然軍監トシテ差置クトノ回答アリ、今回改メテ軍曹トセラレタルニテ、去ル廿七日ニ高田ヘ赴キタル岩村ハ、此日渋川芽ト同道シテ、関原ニ帰リ来レリ、是ニテ余モ大ニ安心スルコトヲ得タルナリ

六日ニハ、加州兵三小隊到着シタルヲ以テ、其内一小隊ハ十二潟ニ、二小隊ハ出雲崎ニ繰リ出シ、其藩ノ手ニ應援セシメタリ

七日ニ至リ、宮様附属ノ軍曹芳野昇太郎来陣、宮ニハ

去月廿八日ニ敦賀ニ御着、当方ヨリノ迎艦ヲ御待チニツキ、摂津纜差立ヲ請フトノ事ナリシカバ、折節出雲崎ヘ出張中ナリシ吉井ヲ呼ビ迎ヘテ相談ノ上、摂津纜ヲ敦賀ヘ廻ハシ、宮ニ随行ノ諸兵ハ、陸路東岩瀬ニ出デ、同処ヨリ加州ノ軍艦ニテ、当地ヘ来ルベキコトニ協議ヲ遂ゲタリ、此日高倉殿ヨリ、総督御免ニツキ近日帰京ノ旨、特使ヲ以テ申越サレタリ

函館ヨリ、ハ日ヲ以テ愈ヨ関原ヘ転陣セラレタルガ、是マデハ戦線非常ニ延長シ居リテ、而シテ味方ノ兵力ハ甚ダ寡少ナリシニヨリ、関原ノ本営ノミニテハ、全軍ヲ指揮スルニ不便ナル事情アリ、従ツテ長岡

ニ其ノ出張所ヲ設タル少要アリシト雖モ、薩長ガ長岡ト関係トニ分レ居ルト云フ様ノ有様ニテハ、前ニモ屢記載シタル如ク、万事ニ不都合多キノミナラズ、味方ノ兵力次第ニ加ハリ、遠カラズ新潟ヲ指シテ進撃ヲ行フニ至ルベキ今日、最早関原ニ根拠ヲ置リノ必要モ之ナキヲ以テ、余ハ此際卿ノ長岡ヘ陣ヲ進メラルヽヲ可トシ、卿ハ九日ニ直チニ長岡ニ轉陣セラレタルヲ以テ、余ハ福田ヲシテ長岡ニ至ラシメ、會談所ヲ同処ニ移スコトニツキテ協議セシメタリ

右ニツキテハ、長岡ニ於テモ更ラニ異議ナカリシヲ

以テ、便チ之ニ決シ、十一日ヲ以テ、愈ヨ會議所ヲ長岡ニ移シ、各藩ニ之ヲ布告シテ、諸藩ニモ各本陣ヲ長岡ヘ繰ヘシムルコトヽシタリ、而シテ會議所ハ、西園寺卿ノ宿陣ヲ以テ之ニ充ツルコトヽシ、吉井、黒田、前原及ビ余ノ四人ガ、日々茲ニ詰メ合ハスコトヽナリ、余モ十二日ニ長岡ヘ移リタリ

前原ガ参謀ニ任セラレタルハ、何時頃ノコトナリシヤ、奇兵隊ノ日記ニハ、勿論太政官日誌及ビ北征日誌等ニモ、絶テ之ヲ記シアラズト雖モ、前原ガ参謀トシテ戦地ニ在リタルハ、多分可カラザルノ事実ニシテ、余ノ記臆違ヒニ非ザルヲ確信ス

前段ハ又、当初ハ痛ク薩人ヲ嫌ヒ、其後数日ナラス黒田ト感情ノ衝突ヨリシテ、参謀ヲ辞シテ帰国セントマデモ云ヒ居タル程ナリシガ、頓テ大ヒニ吉井ト親密ニナリタリ、後チニ聞キタル所ニ拠レバ、尓来吉井ハ深ク前段ヲ称揚シ、以テ長州人中罕ニ見ルノ人物トイシ居タル由、

仁和寺宮ガ総督トシテ出征セラル、コトヽナリシ以来、岩倉卿ハ、前ニモ記シタル通リ、宮ノ参謀トナラレタルヲ以テ、其ノ職務ヨリ云ヘバ、別ニ我々ト殊ナルコトナキ訳合ナレドモ、是マデ久シク我々ノ総督タリシ人ナル上ニ固ヨリ我々トハ身分ノ異ナリ

タル人ナレバ、其後モ依然、前鋒ノ総督トシテ、之ヲ待遇シタルナリ、柳モ当時ノ兵タルヤ、決シテ徴兵制度施行後ノ兵ノ如キモノニ非ズ、朝廷ニ直属スルモノトテハ、御親兵ト称スル極メ少数ノ應募徴兵ニ止マリ、其他ハ悉タ朝廷ノ命ヲ奉ジテ諸藩ヨリ北越ヘ出張ニシメタルモノニテ、是レ兵士ノ手当ハ勿論、彈薬糧食ニ至ルマデモ、総テ其藩々ニ於テ之ヲ負担シ、朝廷ヨリハ参謀若クハ軍監ノ如キ、朝廷ニテ任命セラレタル武官ニ、手足ヲ支給セラルヽニ過キズ、従ツテ各藩皆ナ夫レ〳〵ノ指揮役タリ、之ヲ統一シテ一定セル指揮命令ノ下ニ動カシムルガ如キ、今日ヨリ

之ヲ想像スレバ、殆ンド得テ望ム可カラザルコトナリ、唯薩ト長トハ、勤王討幕ノ率先者タルノミナラズ、其兵力モ他ノ諸藩ニ比シテ、多数ニシテ且ツ練熟ナリシヲ以テ、自カラ他藩ノ兵隊ヲ指揮スルノ力アリ、作戦計画ハ、常ニ薩長ノ會議所ニ於テ決定セラレ総督府ハ西園寺卿ノ時ニモ勿論、仁和寺宮ノ時ニ於テモ、殆ンド会談所ノ報告ヲ受クルニ過ギザリシ情況ナリ

然レドモ、此ノ薩ト長トモ、常ニ同心一致シ居レルニ非ズ、機ニ觸レ事ニ臨ミテ、往々意見ト感情トノ衝突ヲ免カレサリシコトハ、上来ノ記事ヲ見テモ之ヲ察

スルニ餘リアルベシ、殊ニ黒田ニ對スル長州人ノ不満ハ、実ニ非常ニシテ、殆ンド得テ制止スベカラザルモノアリ、余ノ如キモ真逆ニ前原ノ如ク、職務ヲ抛ツテ帰國セントマデハ考ヘザリシモ、而カモ参謀ヲ辞シテ、奇兵隊ノ一人トシテ行動スルノ、一身ニ愉快ナルハ、勿論、結局朝廷ノ為メニモ、忠義トナルベキヲ思惟シ、断然辞表ヲ提出シタルコトアリシナリ、而シテ余ノ辞表ハ一旦聽届ケラレタルモ、尋テ総督宮ヨリ懇諭アリ、遂ニ又留職スルコトヽナレリ、奇兵隊ノ日記、七月十六日ノ条ニ、余ノ参謀ヲ免セラルヽ旨、京都ヨリ御沙汰アリ、之ニツキ、四條殿余ニ御逢ヒナサレタ

キ旨、其家司小西直記ヨリ通達シ来レリトノ記事アリ、十七日ノ条ニ、余カ柏崎ノ本営ニ出頭シタルコトヲ記シアリ、而シテ北征日誌ノ七月十七日ノ条ニ、御沙汰トシテ

薩　黒田了介
長　山縣狂介

右越後口参謀奉　命以来、不容易尽力、被遊　御感
ル、当表　御出張ノ上者、迅速賊徒平定、奉安　宸襟
度、恩食ル間、愈尽力ノ儀、依頼被遊ル旨、総督宮
御沙汰ル事

トアリ是レ即チ余ノ決心ヲ翻ヘシタル事情ナリ、此

ノ御沙汰書ハ、後チニ長岡ヲ賊ニ取リ返ヘサレタル際、兵火ニテ焼失シタリト覚エ、今ハ手許ニ存在セズ、奇兵隊ノ日記ニ五月分ノ一冊モ、亦此時ニ紛失シタルナリ、

十二日ニハ予、城隊、一中隊、砲隊半座共、新タニ到着シタルノミナラズ、十三日ニハ総督宮モ已ニ高田ニ着セラレ、柳川因州其他ノ兵士八百人御供ニテ、両三日中ニ柏崎ニ着セラルベキノ報アリ、加フルニ越前兵三千四百人ハ、数日前ニ已ニ着シ、明日頃ハ長岡ニ繰リ込ムベキ筈ニテ、其外ニモ尚援兵ノ来リ加ハルベキ見込アリ、且ツ海軍ノカモ漸ク増加シタルヲ以テ、

余ハ茲ニ始メテ、兵ヲ進メテ敵ノ根拠ヲ衝クノ機會ニ到達シタルヲ感シ、海路ヨリ兵ヲ出シテ新潟ノ根拠地ヲ攻撃シ、同時ニ陸路ヲ前進シ開始ンテ、腹背ヨリ敵ヲ挟撃スルノ策ヲ立テ、吉井、恵田、前原等ト種々論議ノ後、遂ニ之ニ一決シタリ

折柄参謀楠田ト尤衛門、新発田人寺田某、相馬某ノ両人ヲ同道シテ到着シタルガ、両人ノ言フ処ニ拠レバ、新発田ハ賊徒ノ為メニ迫ラレテ、已ムヲ得ズ多少ノ兵ヲ出シタリト雖ドモ、固ヨリ王師ニ抗スルノ意アルニ非サレバ、両人帰郷ノ上、國内ヲ鎮撫シテ王師ヲ迎フルコト、シタシトノコトニテ、乗シテ其ノ言ニ

詐リナケレバ、敵ノ背後ニ上陸スベキ軍隊ハ、一層ノ便利ヲ得ル訳ナリ、依ツテ吉井ハ同日即チ十三日ニ相崎ニ赴キ、同処ニ於テ海軍ト打チ合セヲ為スコトニ決セリ

此日我ガ藩侯ヨリ、奇兵、報國両隊ヘノ慰問使トシテ、森清蔵（来島亀之進ト同人ナリ）京師ヨリ来陣シ、尤ノ御直書ヲ交付シタリ

北越為援兵出張被仰付ル処、屢遂苦戦、終ニ長岡城ヲ奪取ル段、感歎之至ニ、追々救助トシテ諸兵出陣申付ル条、一和恢カシテ、可抽忠戦者也

付リ隊中死傷モ不少、不憫之事ニ、醫員差越ル

ニ付、精々療養相加可申ル事

戊辰

李夏念六

十五日ニハ、仁和寺宮愈ヨ相崎ヘ御着陣ニツキ、面圖寺卿ハ御出迎ヒノ為メ、同所ニ出張セラレタルガ、吉井ハ柏崎ヨリ書翰ヲ送リ、山田ト打チ合セノ上、海路進発ノ諸兵ヲ、来ルイ七日マデニ相崎ヘ集合スルコトニ評決シタル旨ヲ報ジ来レリ、依ツテ余ハ前原等ト協議ノ上、長州兵ノ中ヨリハ、現ニ典板ニ在ル所ノ分、即チ奇兵、報國各一小隊、及ビ千城隊二小隊ヲ、其方ヘ差向ケルコト、シ、イ六日ニ越前兵六小隊ト、之ヲ

交代セシメ、直チニ柏崎ニ出発セシメタリ、此日振武隊全部長岡ニ到着セリ

余ハ前ニ記シタル通リ、イ七日ニ相崎ニ至リ、十九日マデ同所ニ滞在シテ、廿日ノ早天ニ、吉井等ト同道長岡ヘ帰リタルガ、余ノ滞在中ハ、連日来ノ風波ニテ、相崎ヘ帰リ来ルコト能ハザリシ諸軍艦モ、廿日トナリ一日トニ、悉ク入港シタル由ニテ、海路進発ノ諸兵ハ、便チ廿三日ノ午後ヲ以テ、朝廷ノ摂津艦、筑前ノ大鵬艦、柳川ノ千別艦、長州ノ丁卯艦、加州ノ錫懐艦、藝州ノ万年艦、以上六艦ニ乗リ組ミ、新潟、松ガ崎ヲ指シテ前進スルコト、トナリタルヲ以テ、陸路ノ方モ、愈ヨ廿五

日ノ曉天ヨリ、進軍ヲ為スコトニ決シタリ、而シテ海路進発ノ兵ノ部署ハ、大要左ノ如クナリシナリ

薩兵百人　長兵百人　藝兵二百三十人　大砲二門（長州大砲隊）

ハ島見名、大夫両村ノ間ノ海濱ニ上陸シ、直チニ新発田ニ進入スベシ

薩兵百人　長兵百人　秋月兵九十人　大砲三門（薩州大砲隊）

ハ松ガ崎ニ上陸シテ、前進スベシ

徴兵百八十五人　明石兵五十人

ハ項見ニ上陸シ、豫備兵トシテ、同所ニ滞陣ヲ為シ、

援兵ノ必要アル方面ニ向ツテ、急ニ進発スベシ

栃木兵五十人

ハ兵糧焚出シ等ニ従スベシ、尤モ時機ニ應ジテ援兵タルベシ

黒田ハ此際辞職帰國ヲ申出タリトノコトナリシモ、矢張リ海軍ト共ニ新潟ノ方ヘ向ヒシ様ニ記臆シ居レリ、余ハ是マデモ餘リ黒田ト會合セザリシガ、是ヨリ後チハ戰地ニ於テ、絶ヘ會見シタルコトナカリシナリ

陸路ヨリノ進擊ニツキテハ、余ハ是ヨリ先キ、前進軍ヲ薩ヲ首カトセル部隊ト、長ヲ首カトセル部隊トニ

分チ、双方道ヲ異ニシテ進マンコトヲ提議シタリ、之ハ薩長ヲ別々ニシテ不愉快ナル衝突ヲ避ケシムルノ念ノミニ非ズ、過去六ヶ月間ノ経験ニヨルニ、薩長以外ノ諸藩ノ兵ハ、多クハ練兵ニ非ズシテ、若干ノ薩長兵ヲ、シテ之ニ伴ハシムルニ非ザレバ、十分ニ其任務ヲ尽カベルノ状タリ、従ツテ両藩ノ練兵ハ、常ニ幾多ノ分隊トナシテ、之ヲ諸処ニ配置セザル可カラズ、日ク東西ニ馳驅スル、其労ハ大ヲ多クシテ、而カモ其ノ技倆ヲ尽スコト能ハザルノ憾ミアルヲ以テ、今回ノ進撃ニ際シテハ、薩長兵ニ其ノ精兵ヲ一団体トナシ、山道平地共ニ破竹ノ勢ヲ以テ、猛進ヲ為シ、一挙ニシテ

新潟ヲ陥落スルノ目的ヨリ出タルナリ、然ルニ、右ニツキテハ、吉井等ニ於テモ毫モ異議ナク、直チニ之ニ一決シタルヲ以テ、余ハ則チ薩ヲシテ其ノ取ルベキ道ヲ選擇セシメタルニ、薩ハ（長岡口ヲ選ビタルヲ以テ長ハ則チ山路即チ）朴尾口ヲ取ルコトヲ、即チ平地即崎口ハ、之ヲ厳守スルノ計画ニテ、諸藩兵ヲシテ其ノ守備ニ任セシメタリ、尤モ浜板口及ビ出雲是ニ於テ、薩長両藩ハ、其ノ引受ケノ方面以外ニ分配シアリタル兵員ヲ、夫レ〳〵長岡ト朴尾トニ集中スルコトヽナリ、薩ハ廿四日ノ夜マデニ、之ヲ朴尾ヘ引揚ケ、長ハ廿五日ノ夜マデニ、之ヲ長岡ニ引揚ケルノ

手段ヲ取リタリ、是レ薩州全部ニ諸藩兵ヲ加ヘタル部ニ諸藩兵ヲ加ヘタル山路ノ兵ハ、廿六日ノ曉天ヨリ攻撃ヲ開始シ、長州全右ノ次第ニテ、廿四日ノ夜ニハ、是マデ長岡ニ在リタル兵隊ハ、殆ンド皆ナ前進シ了リ、長州ノ如キモ、其日共板ヨリ引揚ケ来リタル、滋野、三吉ノ二隊ト、長府ノ報國隊トガ、一宿シ居タル丈ナリシナリ

余等モ廿五日ノ曉天ニ杉尾ヘ向ケテ進発スルニツキテハ、過日来軍状視察ノ為メニ逗留シ居タル、慰問使ノ森清蔵モ、同時ニ京都ヲ指シテ帰リ去ルコト、

ナリシヲ以テ、廿四日ノ夜ニハ、奇兵隊ノ本陣ニテ、之ガ為メニ別杯ヲ酌ミ交シ、雑談ニ夜ヲ更シタルガ、余ハ独リ諸子ニ先ダチテ寝ニ就キタリ

然ルニ未ダ幾モアラザルニ、福田等ハ余ノ枕頭ニ来リテ、呼ビ醒シテ曰ク、只今々町ノ方面ニアタリテ、火ノ手ノ揚ガレルハ、恐ラク進撃軍ガ已ニ攻撃ヲ開始シタルモノナルベシ、我々モ最早ヤ出発スベキ刻限ナラン子ト、因ツテ時計ヲ検スレバ、一時ヲ過グルコト未ダ多カラザルノミナラズ、火ノ手ノ揚レルト云フガ如キ、頗ル不審ニ堪ヘザルモノアルヲ以テ、余ハ蹶起シテ諸子ヲ警戒シ、急ニ斥候ヲ萩原ニ命ジテ騎

馬ニテ出テ、模様ヲ見セシムレバ、豈ニ圖ランヤ、敵ハ已ニ城下ノ町ハヅレニ押寄セ居レリト云フ、焉ンゾ驚愕セザルコトヲ得ンヤ

前ニモ云ヘル如ク、城下ニハ僅少ノ兵アルノミ、其ノ僅少ノ兵モ、多クハ其日ニ長岡ヘ来リタルモノノミニテ、固ヨリ地理ニ明カナラズ、加フルニ土人ハ総テ敵兵ニ味方スルモノト見ザル可カラズ、形勢ノ不可ナル、真ニ言語ニ絶ヘタリト云フベシ、因ツテ余ハ諸隊ニ向フテ、夜中ニ於ケル市街戦ノ危險ヲ冒スコトナク、取敢ヘズ妙見峠ノ方向ヘ退却スベキ旨ヲ傳令シ、直チニ西圓寺卿ノ宿陣ニ至リテ、其所ニ詰メ居タル長三洲ニ、事ノ次第ヲ語リ我々ハ長岡城外ニ出テ、兵ヲ集中シテ恢復ヲ謀ラザル可カラザルニヨリ、先ツ妙見ノ要衝ヲ守備スルノ決心ナリ、足下ハ此旨ヲ西圓寺卿ニ告ゲ、錦旗ト卿トヲ擁護シテ、速カニ関原ヘ退却スベシト命ジ、去ツテ前原ノ宿舎ニ至レバ、前原ハ屋根ニ上リテ火ノ手ヲ望見シ、快哉ヲ連呼シ居タリ、蓋シ前原モ亦、此ノ火ヲ以テ、官軍ノ今町付近ヲ攻撃スルモノト思ヒ誤リシナリ、因ツテ余ハ事ノ極メテ急ナルヲ報ジ、且ツ人数ヲ纒メテ一同ニ退却ヲ為スノ必要ナルヲ語リ、約ニ従フテ妙見口ノ方ニ引揚ケタリ蓋シ長岡ヲ取リ返スニハ、是非トモ妙見ノ

形勝ヲ占メ置カザル可カラズ、然ラサレバ敵ノ為メニ重子テ榎峠ノ険ヲ阨セラレ、五月十九日前ト同様ナル困難ニ陥ルベキヲ以テナリ

其中ニ、賊ハ早ヤ城下ノ市街ニ入リ込ミテ、火ヲハ方ニ放チタルガ、滋野ノ一隊ハ道ヲ失ヒタルニヤ、将タ途ヲ絶タレタルニヤ、一向ニ引揚ゲ来ラザルヲ以テ、余ハ憂慮ニ堪ヘズ、夜ノ将サニ明ケナントスル頃、三吉六郎ノ一隊ヲシテ城下ノ裏手ニマワリ偵察砲撃ヲ試マシメタルニ、此隊モ亦同ジク行衛不明トナリタリ、後ニ聞ケバ三吉ノ隊ハ、交戰中道ヲ失フテ、遂ニ帰リ来ルコトヲ得ズ、奮戰激鬪ノ末、赤木島ヨリ一里許

リノ上流ヲ渡リテ、関東ノ方向ニ退却シ、滋野ノ隊ハ、猛火ノ為メニ途ヲ絶ラレ、加州一小隊、松代十許人トハ共ニ、信濃川堤ニテ激戰ヲ為シ、賊ノ為メニ迫撃セラレテ、中島ナル敵ノ空砲中ニ入リ込ミ、茲ニテ終日敵ト砲火ヲ交ヘタル後チ、夜ニ入リテ始メテ舟ヲ奪フコトヲ得、是レ赤木島ノ方向ニ退却シタリト云フ、同夜ノ混雜ハ実ニ非常ニシテ、大島口ノ方ニ引揚ケタル病兵未幸寺ノ中ニハ、渡リヲ争フテ溺死シタル者サヘモ之アリシ由、余ハ斯カル変事ノマランコトヲ慮リ、赤島ノ渡船場ヘ行ク道ト、妙見街道トノ分岐点ニ立リテ軍隊ノ指揮ヲ為シ渡船場ヘ行ク者ヲ制止